



求道



第六卷  
第二號



求道第六卷第貳號目次

求道

◎無碍の一道

自督

◎不思議の佛智

◎火宅無常

講話

◎逆縁即恩寵

告白

◎理想を求めて信仰を得たり

清水子三郎

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第十 愛の毒矢

第十一 食を貪りし鹿の話

第十二 學ばざりし鹿の話

第十三 賢き鹿の話

第十四 風

第十五 犠牲

講話

◎歎異鈔—第十一章

近角常觀

時報

◎羽村

每日曜午前九時

求道學舎

〔本郷森川町一番地〕

毎土曜午後二時

第二 求道會

〔九段坂佛敎俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三 求道會

〔日本橋蛸殻町説敎所〕

求道

第六卷 第貳號

無碍の一道

一

人生は障碍を以て満たされたり、抵抗を以て成り立てり、敵と敵と相對峙せり、而して吾人は如何にして此人生の間に平和を持來し、春風和融の世界たらしむべきかとは是れ人生問題の焦點也。トルストイ翁曰く、汝の敵を愛せよ、抵抗に對するに無抵抗を以てせよ、人右頬を打たば左頬をも打たしめよ、人上衣を奪はば猶下衣をも彼に與へよと、確に是れ亦萬古不易の眞理也。而して今世翁の理想を追ふもの皆其實行難に歎ぜざるもの蓋し妙さにあらざるべし、既に他人を以て敵と見做し、而して之を中心愛せんと試む、既に他人我に抵抗すと感ず、而して之に對して無抵抗を以て向はんとす、是既に矛盾の心的状態也、不可能の企也。吾人人生初より敵なきことを悟りしてこそ敵を愛するを得る也、人生固より無抵抗なことを信知してこそ無抵抗の態度初めて開け來るを得ん。

抑、トルストイ翁は自ら此内心の實驗を経たるの後、之を實行し、亦他人に之が實行を勸む、而して世人翁の實驗夫自身を得ることを忘れて徒に之を實行せんことを企つ、是即ち信なくして行を得んと欲するもの、船なくして海を渡らんと欲するが如し、實に無妄の擧と謂つべし。而して翁が先づ其實験を人に與へずして直に其實行的敎訓を與ふることも不親切と言はざるべからず、世人は先づ須らく人生敵なく、人生無抵抗たることを實驗せざるべからざる也。

然らば吾人如何にして之を實驗せんか、人生果して敵なくんば人何をか苦まん、人生若し無抵抗たらば何ぞ人生問題を惹起さんや、生存競争の世界、強食弱肉の眞相は抵抗の人生に非ずや、相互敵視の心狀に非ずや、何を以てか人生無敵無抵抗と悟りすることを得ん、是實に人生問題の極致也、此に至りて吾人は自己に於て無抵抗を見出す能はず、他人に於て無抵抗を見出す能はず、人生果して何の所か無抵抗を見出し、平和を持來さんや、是所謂往くも亦死せん、住るも亦死せん、返るも亦死せん、一として死を免れずと云ふもの、吾人何の處にか安所を求めんや。

此の如き抵抗敵視の人生に對して眞に無抵抗の態度を以て



罪惡の敵を愛したまふは獨り如來の慈親也、西岸上の召喚也。汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らんとは正にこれ如來の我等に對したまふ絶對無碍の態度に非ずや、大悲本願の慈愛に非ずや、吾人は此絶對無碍の一道こそ人生無抵抗大平和の源泉なれ。

嗚呼我等は無始より已來今日に至るまで抵抗の間に苦み、敵視の間に戦へり、而して自己が抵抗の深さを悟らず、自身が敵視の強さを顧みざりき、信仰の問題は他人に非ず、自身也、一般の問題にあらず、自覺の問題也。我身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し、常に流轉して、出離の縁あることなし、吾人は如何にするも抵抗を脱する能はざるもの也、敵視の心止まざるもの也、抵抗は他人に非ず自身也、敵とは畢竟我身内の惡業煩惱也。かく我身の罪惡抵抗を自覺したるときは業に既に如來の慈愛無碍の惠の達したるの時也、此の如き我に對して如來は汝と喚びたまふ也、一たび此聲を聞き奉る、既に業に如來の愛子として眞の佛弟子として攝取不捨の慈懷に收めたまふ也、是我能く汝を護らんととの聲に非ずや、我とは盡十方無碍光如來也、不可思議光如來也、能くとは吾人此無碍光の惠に遇ひ奉りたる信狀也、噫罪惡の

吾人何の幸か貪瞋煩惱の水火中に於て能くこの無碍の白道、清淨願往生心を生ずるを得たる、無碍光佛の惠にあらずんば何ぞ此の如くなるを得ん。

かく吾人は無碍光に照さるゝと雖、果して能く、無碍無抵抗の理想界を人生の上に實現し得へきや否や、是亦現時青年の人生問題に於て常に苦める問題なり。トルストイ翁現代の政治法律百般のものを否認して、理想の世界を持來すべしといふ、是亦第二の空想たるを免れず、既に吾人は自身に於て無抵抗を見出すこと能はず、之を如來に見出すを得たり、隨て吾人は理想の世界を現世に見出すこと能はず、之を如來の淨國に見出すことを得べし。然れども吾人は既に現世に於て此如來の慈愛を蒙るを得たり、されば此慈愛を仰ぎつゝ貪瞋煩惱中、此無碍の一道を辿るもの、是れ信仰生活の眞光景にあらずや、吾人は動もすれば如來無碍の徳を私して、自ら無抵抗無敵の態度に出でんとす、而して常に失敗を見出すをみる、是抑々我等が罪惡深重なる抵抗敵視の自己たるを忘るゝもの也、吾人は此世に存せん限りは罪惡の凡夫也、苦惱の衆生也、抵抗の性質也、敵視の根生也、唯如來無碍の徳によりて自己の有碍を自覺しつゝ進むのみ、是れ貪瞋水火の中に白道の存す

我也、抵抗の我也、敵視の我也と自覺懺悔したるときは既に業に無碍の光明に圓融せられたる時に非ずや。和讃に曰く「盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。無碍光の利益より、威徳廣大の信を得て、かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる。罪障功徳の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほし、さはりおほきに徳おほし。」かく如來無碍の慈愛に遇ひたてまつりたる時、知らず識らずの間に頭を垂れて、罪惡抵抗の我たることを懺悔するもの、これ直に如來無碍無抵抗の徳の我身に加へられたる也。

二

吾人は自身に於て無抵抗を見出すあたはずして如來の慈愛に於て之を被ることを得たり、人間に於て無敵を見出すことあたはずして、西岸の召喚に於て無碍圓融の徳を賜ふことを得たり、經に曰く十方無碍人一道より生死を出てたまへり、一道とは一無碍道なり、生死即ち涅槃なりと知る也と。三世十方の間に無碍の一道南無阿彌陀佛ある耳、是れ無碍の源泉也、絶對の一道也、此一道の外に世の無碍無抵抗の道あらむや、

吾人動もすれば信仰の力によりて理想的社會、理想的政治、理想的實業等を實現せんと欲す、固より眞諦の信仰を基礎として世諦の經營を實現するを得ん、然れども決して罪惡なき人生なき煩惱なき生活を實現せんとするは不可能の事也。吾人固より信仰の立場の上に人生のすべてを安んずべきを知る、決して現世に於て清淨眞實の人生を實現すべからざる也。蓮如上人曰く、當流の安心のをもむきは、あながちに我心のわろきをも、また妄念妄執のこゝろのおこるをも、とゞめよといふにもあらず、たゞあきないをもし、奉公をもせよ、獵漁をもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるいたづらものをたすけんとかひまします彌陀如來の本願にたましますと、我々の爲す所政治にあれ、實業であれ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるいたづらもの也、是れ聖人が悲歎述べたまへる點にして、政治實業のみならず信仰を説くもの、が既に名利の徒なり、「是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、小慈小悲もなき身にて、名利に人師をこのむなり」



吾人若し能くくんは頭を地に埋めて以て大悲慈親の膝下に求哀懺悔すべき也。聖人曰く、誠に知んぬ、悲哉、愚禿鷲愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、慙づべし、傷むべしと、是實に聖人が身を以て我等の眞相を示したまふ慈訓也。

嗚呼吾人は此の如く天に踊り、地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬ忘恩の徒なり、急ぎ淨土に參らんとせざる罪惡の凡夫なり、而して無限大悲の慈愛は此の如き我等に向て益々矜哀の涙を瀧ぎ、悲憐の血汐を流したまふ、此の如き罪惡深重の者をすてたまはぬにていよく大慈悲の深重を仰ぎ、此の如き散亂無慚の者をも見捨てたまはぬにてよく慈愛の無邊なるを頂き奉る、嗚呼虚假不實の世界、妄想顛倒の我等如何にして現世にして清淨眞實の理想を實現し得べき、唯如来清淨願心の慈父の御名こそ絶対無碍の一道也、十方の無碍人も此一道より生死を出で、三世の如来も此無碍道を説かんとがためなり、かくて十方の衆生の衆生此無碍光に照されて四海兄弟同一念佛の徒となりぬれば、遂に淨國に生れて盡十方の無碍の光明に一味たる時、始めて究竟絶対の理想界を實現するを得ん

そ弟子にても候はめ、ひとへに彌陀の御もようしにあづかりて、念佛まうし候人を我弟子とまうすときはめたる荒涼のことなり。』と仰せられた。

○一分一厘も我等のはからひで御慈悲は傳はらぬ、全然如来の御催である、如来の御はからひである。

○全體我等が此如来の御思召を忘れるものゆへ、何事につけても愚痴をこぼしたり、我身を歎ぐことになる。

○なるほど人間は不完全であるゆへ、愚痴をこぼすならば一として愚痴の種ならぬはなく、煩惱の凡夫なれば歎かば何事も歎くべきことばかりである。

○されど此不思議の佛智のまします已上は、チャンと如来がよき様にはからひたまふのである、火宅無常の人間なればこそ無上大利の名號があるのである、煩惱具足の凡夫なればこそ如来清淨願心は捨てたまはぬのである。

○論より證據、我等はこうしてあげばよかつた、ああせねはならぬと思ひながら、我手の廻はらぬのを歎いたり、我身の足らぬことを悲んだり、すまぬ〜と思ふて居る間に、佛様が丁度宜しきように御慈悲を届けて下されて、行くべき道を通りて、一味の信心に入れて下さるのである。

自

智

### 不思議の佛智

○人が御慈悲に氣がつきて喜ばれる様子を見たり、また一たび氣がつきた己上は知らぬ間に信力増長して、それからそれへと御慈悲を喜んで下さる人が出来る有様を、まのあたり見せて貰ふときは佛智不思議の廣大なることに、殆んど心も語もたへはてたる有様じや。

○御一代聞書に『人に佛法の事を申て、よろこばれば、われはその悦ぶ人よりもなをたうとく思ふべきなり、佛智をつたへ申すによりて、かやうに存せられ候事と思て、佛智の御方を有難く存せらるべしとの儀に候』と仰せられた。

○私は、かくの如き場合ほど恐れ入りましたと不思議の御力を仰がして貰ふことはない、全體法を説くものが、いつの間にもやら如来の致を我物顔にしたがるのである、それゆへ、我力にて人に届けやうなど、計ひ心が出てくるのじや。

○歎異鈔に『わがはからひにて、人に念佛を申させ候はゞこそ先達て、羽村に参りて、つくつく佛力の廣大無邊なるに驚くばかりであつた、六年已前一たび佛種が播かれてから後、僅か年に一度か二度の御縁でありながら、自然々々人が信仰に入られる、またます〜堅固に相續される。

○羽村ばかりではない、講話に來聽して下さる人や雜誌で共に喜ばしていたゞくのも、一々の方より其御縁を承りてみれば悉く佛智不思議の御催ならぬはない。

○實に此御不思議を離れて佛法はない、本願はない、いつの不思議をとくなかに、佛法不思議にしくぞなき、佛法不思議とくことは、彌陀の弘誓になづけたり。

○世に不思議といふことはあれど佛法ほどの不思議はなく、また佛法に不思議の多きがなかに如来の本願ほどの不思議はない、御一代聞書に法敬坊逆如上人へ申され候、あそばされ候御名號燒申候が六體の佛になり申候、不思議なる事と申され候へは、前々住上人その時仰られ候、それは不思議にてもなきなり、佛の佛に御なり候は不思議にてもなく候、惡凡夫の彌陀をたのむ一念にて佛になるこそ不思議よと仰られ候なりとある。

○誓願の不思議、名號の不思議といふがつまりこの惡凡夫を



佛にして下さる御不思議じゃ、親鸞聖人がたゞ不思議と信じ  
つる上はとかくの御はからひあるべからすと仰せられたが此  
處じゃ。

○『佛智の不思議を信ずるを、報土の因としたまへり、信心の  
正因うることは、かたきがなかなをかたし』

○聖人の御教化の眼目は畢竟此御不思議を知らしていたゞく  
にある、此不思議が不思議と知らしていたゞきたは眞に御不  
思議の力である、たとひ佛にすがるとも、念佛するとも此御  
不思議の夜が明けねば、畢竟疑惑の行者である。

○疑惑和讃に反覆丁寧此不思議を信ぜぬことを誡めたまふ  
てある、此悪凡夫を佛にして下さる本願が信ぜられぬゆへに、  
いつの間にか、知らず識らず自分の力で出来もしない善を爲  
さんと試み、止みもしない悪を止めようと試みるのである。

○悪いものが、よく／＼悪いものであると全く頭が下つたの  
が、全く悪いものをすてたまはぬ御不思議の力じゃ。  
○悪い／＼其裏がよくも／＼すてたまはぬ親様と感謝の心は  
かりである。

○何時も味はして頂く、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ず  
れば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの

つることじゃと示された。

○自然法爾の法語は此如來の御はからひの極じゃ、それゆへ  
他力には義なきを義とす、つねに自然を沙汰せは義なきを義  
とすといふことは、なを義のあるへし、これは佛智の不思議  
にてあるなりと仰せられた言語が盡きて、はや何とも申し様  
もない御不思議である。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

行 誠 上 人

あふがれていつまで世にはふる扇やがて骨ともなり果  
る身を  
あれは又なきを敷へて世の人の足れりと思ふときやな  
からむ  
世のなかばかりほの垣の蝸牛つものさし出すひまにうあ  
りける  
ならば な瀬邊の蟹の横にのみ行けばゆかる、道ばあ  
りとも  
のりの舟さすとばすれど角田川わたしもりにば及ばざ  
りけり  
おきふしを風にまかせてすなほなる竹を心のともがき  
にせよ  
かけたにも法のしるしの見えぬかな心あさかの山の井  
の水  
なす罪もあらで今年もくれればとりあやまりがちに過し  
つる哉

業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたち  
ける本願のかたじけなさよとの聖人の御述懐はどれだけ頂き  
ても盡きぬ難有き御自督である。

○聖人は聖徳太子の御導によりて此不思議を信ぜさせていた  
ゞいた御恩を喜びたまひ、恰も疑惑和讃に引續いて『佛智不  
思議の誓願を、聖徳皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補  
處の彌勒のごとくなり、聖徳皇のあはれみて、佛智不思議の  
誓願に、すゝめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる』  
と御喜びなされた。

○加之聖人は皇太子の御手引によりて家庭生活の儘て如來の  
本願を信じ、在家信仰の化儀を御示し下された、是皆佛智不  
思議の御はからひによることである『久遠劫よりこの世まで、  
あはれみましますしるしには、佛智不思議につけしめて、善  
惡淨穢もなかりけり』と奉讃したまひた、思へば今夜は皇太  
子の祥月御速夜である、今日我等が同様に佛智不思議を蒙る  
ことの嬉しさ、よく／＼の仕合せ者である。

○法然上人が念佛は義なきを義とし、様なきを様とすと仰せ  
られたが此處じゃ、親鸞聖人が晩年まで此御言を讃仰して、  
行者のはからひなくして、唯如來のはからひにまかせたてま

火 宅 無 常

○前月市中の篤信な方が第二求道會へ來られて選擇本願は如  
來様の親心じゃといふことを聞きて、深く喜ばれ、自分ばか  
りてなく、両親を初め、一族の人にも聞かしたいとて、切な  
る招待を受け、前月來約束をして先日其宅にて講話する御縁  
が熟した。

○偕主人と對話して、其如何にも深き歡喜に感じて、入信の  
次第を尋ねたるに、自分は嘗て東京市中によく行はれてある  
現世祈禱に陥て居た、しかるに美濃より來て居た一老婆があ  
つて、それでは仕方がない、佛法に入れよ、佛の御恩を知れ  
と、色々心配してくれたが御縁となりて御慈悲を知らして貰  
ひました、しかも今日は恰も其老婆の命日に相當て居ります  
との事であつた。

○ます／＼不思議の宿縁を感謝しつゝ、正に講話を初めよう  
とすると、一人の參詣者が來りて言ふには、今恰も道條に火  
事がありました、來着してみれば御當家の所有てありました  
そうでありますとの事、私も如何にも不意に打驚き早速主人  
に尋ねた。



○主人の答に唯今電話で知らして参りました、昨年十一月來空家になつてあつた、火災保険も恰も切れたが、夫れも其儘になつてありました、空家であつたゆへ、乞食でも入りて火を失したのであります、イヤ是丈の約束であります、是であるから平生聴聞さして貰ふて居ります通りであります、と、主人を初め婦人達にいたるまで、如何にも落付て、あてにならぬ此世じやとかねて知らして頂いたのであります、如何にも尊き法の悦である。

○偶々尊き招待を受けた此夜、此の如き災の起るも畢竟、供養を受くべき價値なき我不徳を戒めたまふ事實と、心中深く慚愧に堪へなんだが、また考へて見れば恰も此夜招待にあづかり、亦正に講話せんとする時此事實を面り見せていたゞくは唯事でない、加之火も既に終りたれば此際ますゞ法を聞かんとせらるゝ一家の求法の志の深さに動かされて、直に所感の儘を披瀝した。

○『聖人のおぼせには、善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろに、よしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあじとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそあしさをしある。

○本光坊が火中神師御直筆の證卷を取出さんとして、遂に割腹して、之を體中に收めて、火災を免れしめたも此時の事である、これにつけても蓮如上人及御弟子の御苦勞が思ひ出される、如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし、師主知識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし、

○此の如き火災後に一家の人が其災を苦にせずして、却て之を御縁として、聞法求法の志の深きは決して唯事ではない、たとひ大千世界に、みたらん火をもすぎゆきて、佛の御名をさく人は、ながく不退にかなふなり、實に遇ひがたき御縁の席である。

○一家擧て一入御縁を喜ばれて喜に堪へず、口を衝きてあらはれて下さる全佛の裡に其家を辭し、深夜大厦高壯の街衢を打眺めつゝ、世間虚假、唯佛是真を繰返しつゝ、稱名念佛して學舎に歸つた、此時ばかりは寤寐に念佛を忘るゝことが出来なんだ、其夜勤行の時學舎の人々に話し、翌日日曜講話にも其事を御話をして衆くの人が御縁に遇はせて頂いた。南無阿彌陀佛。

りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにあはしますとこそおぼせはさふらひしか、

○今が今、主人と對座して御縁を喜びつゝあつた其時は恰も其所有の家宅が炎上しつゝあつた時である、何か善いやら、悪いやら、一切我等凡夫の分かることではない、火宅無常の世界とは、かねて覺悟はしながらも、かくまでも、そらごと、たはごと、まことなき世間とは知らなんだが、眼前の事實こそ夫を知らして下さる御手廻はしじや、かく世の實はたのみなきに、無上大利の寶こそ火にも焼かれず、水にも朽ちざる眞の寶であると知らして下された、聖徳太子が世間虚假唯佛是真と仰せられたがこれじや。

○蓮如上人吉崎に於て年來虎狼のすみなれし山中を引き平げて、立派に結構造作したまひし後、南大門より火起りて、北大門に至るまで全焼して、一夜の焦土となつたとき、御文に之を示したまひて、火宅無常のことばり今こそよくは知られた今世では何事も役に立たぬ、夫につけても無漏法性の淨土に往生を樂まして貰へとの御教化 實にひしゞ身に泌む御言て

講 話

逆縁即恩寵

(求道學會日曜講話)

近 角 常 觀

今日の題は『逆縁即恩寵』であります。今日此の題を出しました譯は、先日來私共有縁の善知識が此方へお出になり、其の度々のお話の中に私が最も深く感じたのが此のお言葉でありましたから、今日は之を題として自分の喜びを披瀝し度いと思ふのであります。

外でも有りませぬ、今度私共の法主が上京して所感を話された中に、自分も今度は就職勿々であるから、普通ならば純傳道に身を委ねて全國を廻り度いと考へて居る。併し何分今は自分の境遇が諸方面に困難の場合故、全然道を辿るといふ譯にも行かぬ。併し熟々考へて見るに、佛敎に順逆二縁といふ事があり、順當に行く事もあるが、時には自分の考へに反した逆縁に因つて廣大なる御導きを蒙る事がある。今自分として考へて見るに、若し今日の非運が無つたなら、必しも此の冬空に今回の如く諸國を遍歴し、一日も休みなく津々浦々迄出懸けるといふ機會は無つたかも知れぬ。つまり余儀なき事



情に迫られて斯く諸方へ出かける事になり、親しく各地の御同朋に出會ふ事の出来るのも全く佛の御手引きである。自分斯く考へて深く喜ぶ事である。」といふお話を有りませした。私はお目にかゝるなり此のお言葉を承はり、實に深く感じた事でありませ。と言ふのは既に前々より度々申上げた如く、我々が信仰上より喜ばせて貰ふにしても、常に自分の理想的生活を日々自分の上に實現して喜ぶといふ事が、人生上に實際有り得るかといふに、有り得ぬのである。言ひ換ふれば設ひお慈悲を喜んで居ても、其中には斯くなるだらう、此の次には斯く仕度いものだと、現在與へられたるお恵みには満足せずして、常に其の先きくと眺めるのが我々の癖であるが之が非常な間違ひである。我々は設ひ現今自分に不満足なる境遇にあるにせよ、又不得意なる時代に在るにせよ、何の時の何の處に於ても、其の場合其の場合に満足させて貰ふのが何より有難いのである。況んや信仰上より言ふ時は、何時如何なる時であれ、人生お慈悲ならざる所は無ないのである。私は今度御法主より「逆縁が却て各地の御同朋に出會せて貰ふ御恩で有つた、若し此の逆縁が無つたら斯くも澤山の同朋に出會ふ事は出来なだであらう」と、丁度今春來皆さんにお話して居た處と全く同じ思召しを承はり、一入深く喜ばせて頂いた事でありませ。

其處でお互一人々々が人生に處するに就きて、此の逆縁即恩寵といふ事を何より深く喜ばねばならぬと思ひませ。我々が日常生活の上に於て、佛のお慈悲はいつ喜ばして貰ふのであるか。心の樂な時喜ばして貰ふのであるか。又の心の苦

の如く聖人御一代の道筋を頂くと、九歳御出家迄が人生的には非常な逆縁で有つた上に、其後の長の御生涯が何うかといへば、殆んど一日と雖人生的には御安心の暇が無い。即ち九歳より十九歳磯長の御廟で聖徳太子の御靈告を受け給ふ迄は、叡山に於て専ら道を求め給ひたが、何うしても安心の道が見當らぬ。殊に十九歳御靈告以後二十九歳法然上人に御會ひなさる迄は殆んど頭燃を拂ふが如き勢ひで出離の要法を求め、晝夜の別なく御苦勞なされたのである。斯くの如く聖人が法然上人にお會ひなさる迄の廿九年の御生涯は、實に何とも言へぬ逆縁であつたのであるが、而も其の逆縁が御導きとなり、廿九歳の御時法然上人にお會ひなされ、茲に初めて佛陀大悲の御恵みをお喜びなされたのである。即ち我々が今日頂く處の如來のお恵みを、聖人が此の時初めて頂き下されたのである。

毎々申す『和讃』であります、聖人は法然上人の事を深くお喜びなされて、

諸佛方便ときいたり、源空ひじりとしめしつゝ、  
無上の信心をしへてぞ、涅槃のかどをばひらさける。

茲に「諸佛方便時いたり」と示し下されたが實に有難い。親鸞聖人の御意にして見れば、二十九年の長の苦勞も皆な之れ諸佛御方便の御導きである。否な久遠劫來如來の御方便は常に此身を離れ給はず、彌々其の時節到りて茲に法然上人聖として日本の國に顯はれて下され始めて無上の信心教へてぞ、凡夫往生の道をば、お開き下されたのである。即ち法然上人は我々衆生の機縁熟するを待ちて、彌々現はれて下された應

しき時お慈悲に氣附かせて頂くのであるか。心の苦しき時は其の苦し味に抑えられて直ぐには氣が附かぬが、思ひ反すと斯の如き苦しき世の中故、斯の如き不充分なる人生故、如來のお慈悲が彌々有難いのである。夫て熟々頂くに何うしても逆縁即恩寵である。此事に就きては餘程しつかり味はせて頂かねばならぬと思ひませ。

親鸞聖人の御一代に就きては兼ね〜お話致した事でありませ、聖人一代の御苦勞を頂いても、何れかと言へば矢張り逆縁がいつも難有きお慈悲を引立て、下さる御縁になつて下さるのである。先づ聖人の御一代は何うかといふに、幼少の時父を亡ひ母を亡ひ、遂に九歳の時出家得度あらせられた。既に九歳の時御出家あらせられたといふ事夫れ自身が、之を人生上より見る時は非常な逆縁なのである。其の上に其の彌々御出家といふ迄の人生の道行が又非常な逆縁にお出なされたのである。而も其の逆縁が御縁で遂に出家得度遊ばされた。即ち『御傳鈔』に、

しかあれば朝廷に仕て霜雪をもいたゞき、射山に趨て榮花をもひらくべかりし人なれども、興法の因うちに萌し、利生の縁ほかにもよほし〜によりて、九歳の春のころ、阿伯從三位範綱卿、前大僧正の貴坊へ相具し奉つて鬚髮を剃除し給ひませ。

とある如く、世の常ならば聖人は藤原氏の名門故、朝廷に仕て大に名譽の地位を占め給ふのが當然であつたのに、境遇上より遂に出家發心遊ばされ、九歳の春の頃栗田口の青蓮院に於て慈鎮和尚の下に縁の黒髮を剃除し給ひたのである。斯く

現の聖てあらせられる。又宣はく、

眞の知識にあふことは、かたきがなかになをかたし、  
流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき。

親鸞聖人が法然上人にお會ひなされたのは、即ち眞の知識にお會ひなされたのである。其の眞の知識に會ふ事は、難きが中に猶ほ難い、實に難中の至難であるが、今は不思議にも諸佛方便時到りて會ひ奉る事を得たとお喜びなされたのである。「流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき」と、迷ふと迷はざるとは、此のお恵みを信ずると信ぜぬとにある。如來のお恵みを信ずる者は直ちに涅槃の都に生れ、之を疑ふ者は永く三界に流轉して止む時が無いのである。之は一月の『求道』の社説の頭にも引置きませたが、法然上人『選擇集』の御文に、

生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能入と爲す  
といふ御言葉であります。以上二首の和讃は此の御文から作りになつたのであります。

其處で親鸞聖人は斯の如くして眞の知識に會ひ、信仰に入りて御安心なされたが、偕て此からは凡て理想的に進んだかといふに、曰く否である。聖人は信仰に入りてからは、更に一層の御苦勞が多かつたのであります。聖人が法然上人の側に居られたのは、二十九歳より卅五歳の御時迄の七年間であるが、此の七年間は何れかと言へば聖人の御一代から想像するに、表面上よりは最も平穩であつたらしく思はれる。夫は此間は常に京都にお出になつて、日々御師匠の側に上り、法



を聴聞なされたのであるから、日常生活の上よりは最も無事に有つたかも知れぬ。併し退いて考へるに、丁度聖人の信仰に對して疑を狭み、聖人の教を迫害する者は、此の間が最もひどかつたやうである。聖人は『化身土卷末』に於て自ら此事をお記しなされて、

竊に以れば聖道の諸教は行證久しく癡たれ、淨土の眞宗は證道今盛なり。然るに諸寺の釋門教に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷て邪正の道路を辨ふること無し。云云。

即ち當時の學者僧侶、釋門儒林、皆な眞假の門戸を知らず、邪正の道路を辨へず、妄に忿怨の心を抱いて四方八面より法然上人並に親鸞聖人の教に迫害を加へ奉つた。而して其結果が遂に御師匠法然上人と共に三十五歳御流罪となつたのである。御流罪となつたは卅五歳の御時であるが、實は此の七年間に於て諸方面より加へられた迫害謗難の極が此の結果に現はれたので、即ち此の七年間は表面より見れば稍平安のやうであるが、實はなか／＼無事では無つた事と察せられるのであります。

偕て彌々御流罪となつて、卅五歳より卅九歳の御時迄五年間の御苦勞は實に言語に絶えたもので、殆んど考へるにも考へられぬ。今から思ふと此の間は眞つ黒に墨を塗りまぶしたやうなもので、御苦勞の塊りと言はうか、何と言はうか、是れ彼れと並べ立て、言ふにも言へぬ御苦勞である。偕て卅九歳流罪御赦免になつて、先づ之で一段落である、之れから京都に歸らうと道迄お出になると、法然上人が正月二十五日に

人生的には何う見ても逆縁である。而も此の逆縁によつて彌々御慈悲をお喜びあらせられたのが聖人の御一代である。之は我々が信仰を喜ばせて貰ふ上に深く氣を付けねばならぬ點と思ひます。

二

我々が御慈悲に入らせて貰ふにしても、多くは此の逆縁に氣が附きてお慈悲に入らせて貰ふのである。又お慈悲に入りて喜ばせて貰ふ上から申しても、此の逆縁によりて喜ばせて貰ふのが何より有り難いのである。之に就きて私は度々申す事であるが、親鸞聖人が『觀經和讃』に御示し下された所を常に有難く思ひます。殊に其中にお示し下されてある方便の二文字が實に有難い。方便とは、即ち聖人の和讃に、

釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。とあつて、釋迦彌陀の二尊が我々の上に種々に善巧方便して我等に無上の信心を起さしめて下さる。即ち我々が人生上に於て種々の問題種々の境遇の爲に苦む、其の苦む上に佛は種々方便の手廻しをして我々に信心を起さしめて下さるのである。

茲で一寸申しますが、例の二河白道の喩であります。人生上右も左も光が無くなつて、無人空廻の沙漠の中に唯獨り居るのが我々の有様である。日比は誰もさうは思つて居らぬが、氣附きて見れば何人も皆な斯うである。其の中に於て唯獨り釋迦の慈父は我々の行くべき道を指示して下され、彌陀の悲

御往生なされたといふ事をお聞きなされたのである。此の時の聖人の御悲歎は如何ばかりであつたて有らうか。既に御師匠が御往生なされたとすれば、京に歸つた所が仕方が無い。之よりは一層田舎に止まつて偏鄙の群類を化益しようといふので、夫より東國、長の御傳道が初まつたのであります。東國御滞在は二十年間であるが、東國は今でも割合に他國より宗教の少い處である。況んや其頃には全く無宗教の地であつたに違ひ無い。其の東國に於て廿年間御苦勞下されたのである。而して其の間に於て御成就せられたのが眞宗の『教行信證』であります。廿九歳の時お頂きなされた信心の味はひを、漸く五十三歳の時東國で『教行信證』を御製作下されて後代の者に御遺し下されたのである。之で見ると或は聖人御流罪の逆縁にお遭ひ下されずば、從つて東國にお出の事も無く、又從つて聖人の御教化、廿九歳御入信以來御流罪五箇年は無論、御一生涯片時もお忘れ無くお喜び下された聖人の御教化は有つても、此の『教行信證』は遺つて下さら無つたかも知れぬのである。斯く思ふと此の間に何とも言ふに言はれぬ佛意の廣大なる思召しを頂く事が出来るのであります。斯くして聖人は六十歳の御年迄東國で御喜び下され、六十歳後は再び京都に歸つて晩年をお過し遊されたのである。其の京都の御生活といふのも一定の御住居が有つた譯では無く、所謂扶風馮翊所々に移住し歩いて、極めて詫しき御日暮であつたのであります。

斯く聖人の御一代を頂いて見ると、殆んど逆縁ならざる時は片時も無い。或は考へやうて順縁とも言へるかも知れぬが、母は廣大の慈悲を以て我々を呼んで下さる。此の慈父母の教へにより、我々は初めて阿彌陀佛廣大の慈悲に氣就かせて貰ふのである。即ち釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を發起せしめ給ふのである。佛陀廣大の慈悲は此の恵みを知らせるに二尊の慈父母を以てして下さるのである。其處で我々が日頃此世が苦しいとか、頼り無いとか言ふて居る境遇は、是れ皆な此の慈父母が我々に此の大悲の親心を届ける爲の御方便である。處が我々が此世の事に氣を取られ、つまらぬ事に満足を見出して居る間は、此の眞實のお恵みに氣が附かぬ。氣が附かぬが彌々此の御方便に催うされて、自分は右も左も後も何とも仕様の無い者である。人生何處にも安心の出来ぬ境遇に在る者であると氣の附いた時に、初めて此の者を呼び懸け給ふ廣大の御哀れみに氣附かせて貰ふ事が出来るのであります。

昨日九段でも申した事でありますが、結局信仰の要點は何處に在るか、といふに私は今度御法主の御親教に示されたる『口傳鈔』の御教化を實に有難く頂きました。夫は次の御文である。さればいくたびも先達よりうけたまはりつたへしがごとくに、他力の信をば一念に即得往生と、りさだめて、そのときいのちをばらざらん機は、いのちあらんほどは念佛すべし。これすなはち上盡一形の釋にかなへり。(乃至)そのゆへは如來の大悲短命の根機を本としたまへり。もし多念を以て本願とせばいのち一刹那につゝまる無常迅速の機、いかてか本願に乗すべきや。されば眞宗の肝要一念往生を以



て淵源とす。(乃至)一念を以て往生治定の時剋とさだめて、  
いのちのぶれば自然と多念をよぶ道理をあかせり。され  
ば平生のとき一念往生治定のうへの佛恩報謝の多念の稱名  
とならふところ、文證道理顯然なり。云云。

即ち要點は信の一念に在る。此の信を發起させんが爲に、釋  
迦彌陀の慈悲の父母の種々なる善巧御方便も居て下さるのて  
ある。茲は是非皆さんに能く聞いて頂き度いと思ひます。聖  
人は「行卷」に此の所を又次の如く示し下された。

大小の聖人、輕重の惡人、みなおなじくひとしく選擇大寶  
海に歸して念佛成佛すべし。こゝを以て論の註にいはいはく。  
かの安樂國土は阿彌陀如來の正覺淨華の化生するところに  
あらざることをなし。同一に念佛して別の道なきがゆへに。  
しかれば眞實の行信をうれば心に歡喜おほきがゆへに之を  
歡喜地となづく。之を初果にたとふることは、初果の聖者  
なほ睡眠懶惰なれども二十九有にいたらず。いかにいはん  
や十方群生海この行信に歸命すれば攝取して捨てたまは  
ず、かるがゆへに阿彌陀佛となづけけたまつる。之を他力  
といふ。こゝを以て龍樹大士は即時入必定といへり。曇鸞  
大師は入正定之數といへり。あふいて之を憑むべし、専ら  
之を行すべきなり。良に知ぬ、德號の慈父ましまさずは、  
能生の因闕けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁をむ  
きなん。能所因縁和合すべしと雖、信心の業識にあらざるは  
光明土にいたることなし。眞實信の業識斯れ即ち内因と爲  
す。光明名の父母斯れ則ち外縁と爲す。内外因縁和合して  
報土の眞身を得證す。故に宗師は光明名號を以て十方を攝

と示し下されたも又之であります。我々は斯の如き罪惡の  
者の爲に、南無阿彌陀佛と名乗らせ給ひて迎へんと呼んで下  
さる此の廣大の親の慈悲に遇はせて貰うた之れ一つて安心さ  
せて頂くより外に仕様は無し。

又之を先程申した二河白道のお諭へて頂くと、「西岸上に人  
有つて喚んで言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝  
を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。  
之は「愚禿鈔」で頂くと、

西岸上に人有つて喚て言はくとは阿彌陀如來の誓願なり。  
汝の言は行者なり。斯れを則ち必定の菩薩と名く。

と有つて、西岸上の喚聲といふは、即ち今の選擇本願の事て  
ある。我々は此の本願の御喚聲に氣を附けさせて貰はねばな  
らぬ。信樂を開發させて頂くといふのも、即ち斯く迄に我々  
如き罪惡の者を見捨てずして昔より呼びづめにして下さる  
如來の本願の御心一つを頂かせて貰ふ丈である。偕て斯く如  
來の親は昔より我々を待ち設けて、呼びづめにして下さる。  
夫程の廣大な恵みに我々が氣が附かぬは何故であるか。其  
の親の恵みをないがしろにして、親が無くても人生は行ける、  
此の世の中は親無しに廣い野原をさまひ行けると思つて居る  
から。夫程廣大の御呼聲も聽えて下さらぬのである。然らば  
其の喚聲の聽えて下さるのは何時であるか。いつ如何にして  
聽えて下さるのであるか。我々が忽然として目が醒めて見れ  
ば右より左より群賊惡獸はさほひ來り、前は火の河、水の河、  
後は異學異見別解別行の族を取り圍まれて居る。前後左右も  
う何とも仕方が無いとなつて、茲に初めて一條の白道が有る

化し、但信心をして求念せしむと云へり。又念佛成佛は眞  
宗と云へり。又眞宗遇ひがたし云へり。知る可し。

之は大分長い御文であります。釋迦彌陀の慈悲の父母が我  
々の信念を育て上げて下さる味はひを申すが爲に拜讀致した  
のである。其處で其の信心といふは何か。即ち斯く迄我々を  
哀れみ下さる佛の御親心を頂く事、是れ一つである。

其處で今拜讀した御言葉は何を指示下されたかといふに  
法然上人の選擇本願の御意を指示下されたのである。法然  
上人の選擇本願の御教化は、一昨年來既に度々申上げたので  
あります。我々如き罪深き者、穢れたる者、心を靜にして  
坐禪や觀念を疑らす事の出來ぬ者、乃至孝養父母奉事師長の  
出來ぬ我々に對して、南無阿彌陀佛と名乗らせ給ひて迎へん  
と計らはせ給ひたる御親心の塊が選擇本願である。我々が何  
一つ出來ぬ罪惡の衆生なるを哀れみて、其者の爲に南無阿彌  
陀佛と名乗りを擧げて助けんと呼んで下さる御呼聲が選擇本  
願である。であるから此の選擇本願は、大小の聖人、輕重の  
惡人、優れたる大小乗の聖人も、又如何なる惡人罪人も、其  
罪の輕重に係はる事なく、皆な等しく哀れみて下さる選擇の  
大寶海である。故に此の「選擇大寶海に歸して皆同く齋く念  
佛成佛すべし」で、我々人間は外に仕様は無い、唯此の選擇  
大寶海の御恵み一つに歸して今度は念佛成佛させて頂くばか  
りである。此の廣大のお恵みに氣の附いたのが即ち信であり  
ます。聖人が「信卷」の臂頭に於て、

夫れ以れば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起  
し、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり。

事に氣附かせて貰ふのである。既に此の道あり必ず度すべし  
と思ふ刹那、忽ち東の岸よりは釋尊の勸め給ふ聲、西の岸よ  
りは阿彌陀佛の喚びかけ給ふ聲が初めて耳に聽えて下さるの  
である。其處で之を人生的に言ひ換へると、即ち我々は人生  
に苦しんで初めて親の慈悲に氣附かせて頂くのである。偕て  
氣が附いて見ると釋迦彌陀二尊は我々が斯の如き者なる故、  
早く此の慈悲を知らせ度いと、東の岸より指示して下さるの  
が釋尊一代の御教化であつた。又西の岸より早く此處へ來て  
安心せよと呼んで下さるのが阿彌陀佛の御本願であつた。人  
生の苦惱の中に此の二尊の御手引きあり、我々初めてお慈悲  
に氣附かせて貰へるのである。即ち「信樂を獲得する事は如  
來選擇の願心より發起し、眞心を開闡する事は、大聖矜哀の善  
巧より顯彰せり」である。我々が信心を開闡する事の出來る  
のは、全く大聖矜哀の善巧、釋迦彌陀二尊の御手引きによる  
ものである。

其處で先程言ひかけた觀經の御和讃になります。

彌陀釋迦方便して、  
阿難目連富樓那章提、  
達多闍王頻婆娑羅、  
耆婆月光行兩等。

大聖のくもろともに、  
凡愚底下のつみひとを、  
逆惡もらさぬ誓願に、  
方便引入せしめけり。

釋迦韋提方便して、  
淨土の機縁熟すれば、  
兩行大臣證として、  
闍王逆惡興せしむ。

之は實に著して御教化である。親鸞聖人は彼の「觀經」に顯は  
れたる阿闍世王の大逆罪に對しても、之を彌陀釋迦二尊の方  
便引入の御慈悲と頂きなされたのである。であるから此三



首中方便の文字の無いのは一首も無い。殊に初の和讃の如き皆人の名前ばかりで其中に有るのは唯此の方便の二文字である。其の彌陀釋迦二尊の御方便は、即ち東岸上の釋尊の御指示、西岸上の阿彌陀佛の御呼聲である。其の御聲は何處へ響いて下さるか。前は火の河、水の河、後は群賊惡獸と何とも仕様の無い其處へ呼びかけて下さるのである。其の何とも仕様の無いのは何處か、即ち人生にある。其の人生は何處にあるか、「阿難目連宮樓那草提達多闍王頻婆娑婆羅耆婆月光行兩等」と、是れ人生其の儘である。而して此の觀經の逆縁を親鸞聖人は如何にも頂き下されたかといふに、此等の諸の人の中には善人も有れば惡人もある、釋迦耆提も出になれば達多闍王もあるが、之れ皆な釋迦彌陀の御方便により、我々凡愚底下の罪人を逆惡もらさぬ誓願に方便引入せんが爲に顯はれ給ひし大權の聖者であるとも頂きなされたのである。て此の聖人の御教示で頂くに、觀經の説相は此等大權の聖者方が衆生の機縁熟するを待つて、殆も役者の舞臺に出づるが如くに此土に出現し、彼の逆惡を現じて我々の爲に彌陀の誓願を指示し下されたものである。夫は何うかといふに能くいふ『和讃』に

彌陀觀音大勢至、

大願の船に乗じてぞ、

生死の海にうかみつゝ、有情をよばうてのせたまふ。

て、大悲のみ親は昔より我々を救はんが爲に、暫時も休みなく人生の諸方面に來往し給ひてある。今此の觀經の逆縁も此の廣大の御苦勞の御顯れてあると頂く事でありませう。

三

求めて苦んで居るのは、全然方角る。斯違ひへ奔て居るのあゝ氣が附けば人生眞に安んず可き物は何處にも無いのである。其者に向つて如來の廣大の御呼聲が響いて下さるのである。茲が最も肝心であります。我々は其の罪深き、苦しみながらも罪を脱する能はぬ者である。其の罪から出られぬ我々に向つて如來の選擇本願は如何にも呼び下さるか。『西岸上に人有りて喚んで言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ』と。汝の言は行者である。今の如く人生の逆縁に閉ぢ込められ右も左も動く事の出來ぬ我々に向つて、佛は何と呼んで下さるか、佛は汝と言つて下さるゝのである。信仰上の味は此の汝の一言で氣附かせて貰ふ事が出来る。佛より汝と呼びかけて下されたと氣が附くと、初めて親に會へるが如く、我々之を喜ばずには居られぬのである。

何もかも一緒にありますが、先程申した『行卷』の文に、「大小の聖人輕重の惡人云云。こゝを以て論の註に曰く、彼の安樂國土は阿彌陀如來の正覺淨華の化生するところにあらざるることなし。同一に念佛して別の道無きが故に。遠く通ずるに四海の中皆兄弟なり、云云。」——同一に念佛して別の道無きが故に四海の中皆兄弟なりといふは、十方衆生等しく大悲の如來より汝と呼んで頂いて見れば、皆な之れ佛の子供である。佛の膝下の兄弟である。我々が眞の佛子と變はらせて貰へるのは、唯此の汝の一言に在るのであります。であるから十方群生海此の如來の南無阿彌陀佛の御呼聲の頂けた時は、皆是れ必定の菩薩である。『愚案鈔』の中に「又是れ必定の菩

偕て大聖各諸共に此の人生に斯く御苦勞下さるゝは結局何の爲であるか。人の爲ては無。此の我々一人々々の爲て有る事を頂かねばならぬ。我々が二河白道を頂くにしても、他の事に目を着けるぢや無い。水火二河の中間に在る一人の行者とは、即ち我々自身の事を言はれたのである。火の河といふは我々自身の心中に暫くも休みなく燃ゆる瞋恚の炎である。水の河といふは貧慾の波である。又群賊惡獸といふも外にあるのては無。結局諸種の誘外や内心の惡業や色々の心である。火の河水の河は何處に燃え何處に浪打つか。我々の内心に燃え、人生に現はれ、浪打つのである。其の間へ諸の大聖は顯はれて我々に何を教え下さるか。皆諸共に凡愚底下の我々を逆惡洩らさぬ誓願に方便引入して下さるのである。先月の『求道』にも書いて置いたのであるが、私自身として考へて見るに、此の凡愚底下といふも言葉が實に有り難い。我々は實に人間淺間しさの限り、底下逆惡の凡愚である。而も其の逆惡を洩し給はぬ誓願に方便引入せしめ給ふのである。即ち此の苦しさ人生に諸の大聖が顯はれて下され、色々の御縁を以て追ひつめて、いやでも釋迦彌陀二尊の御呼聲を聽かねばならぬやうに仕向けて下さるのである。信仰の頂けると頂けぬは實に茲に在るのであります。

信仰が我々の内心で考へたり、思ふたり、感じたりする事ならば、實に力の弱はいものである。が然うては無。我々は何に安心させて貰ふのかといふに、日頃は色々財産や名譽や物質に欲心を起して苦んで居るが、其間に種々の導きて氣が附けば、此等は眞に當てになる物ては無。我々が此等を

薩なり」と示し下されたは即ち茲である。又龍樹大士は即時入必定と言ひ、曇鸞大師は入正定之數と仰せられ、又之を善導大師は希有入なり、上々人なり、眞の佛弟子なりとも示されてある。我々が眞の佛弟子として頂くのは何處であるか、即ち此の人生に此如來の御呼聲を聞いた一念である。

其處て之を又今の『行卷』には「しかれば眞實の行信をうれば心に歡喜多きが故に、之を歡喜地と名く。之を初果にたとふることは、初果の聖者なほ睡眠懶墮なれども二十九有にいたらず、いかに泥んや十方群生海云云。」——彌々汝一心正念の御呼聲が、此の罪惡に苦める我々の胸に種々なる逆縁の御導きて聽かれて見れば、此程嬉しい事は無い。初果といふは自力の行者が功を積み、彌々一點如來の光が見えた時である。設へ光は一點でも自力の行者が長の修行の最後に、佛位の光が見えた時は立ても居られぬ歡びである。故に之を歡喜地と名ける。今我々の胸中に言ふべからざる苦しみがあつたが、一念如來の御呼聲に氣が附いて、あゝ有難いも慈悲であつたと解つた時は、躍り上る程に喜びが溢れて来る。故に之を譬へて歡喜地と申すのである。『願成就の文』には宜はく

有らゆる衆生其の名號を聞きて、信心歡喜し乃至一念せん云云。

餘り歡ぶ方のみを申すと皆さんが喜ぶ方のみを目を着けられるかも知れぬ。初果の地は自力の行者が初めて光に氣が附いて喜んだのであるが、未だ佛になつたのては無。佛になるには未だ十二段の階級がある。であるから佛の光が見えて喜ぶが、都合によると或は睡りたり、懈けたり、睡眠懶墮に陥



る事がある。併しながら一度光に氣が附いた上は、如何に睡眠懶墮に落ちても、もとの二十九有の迷の世界に歸る事は無い。今如來の御呼聲の聞えた者を初果の行者に譬へ下されたは、如來の恵みを頂いた者も又此の通りであるが、之が信心の行者の有様であるぞと知らせ下されたのである。

猶ほ進んで申しまするに、人生に既に此の親が居て下さる。夫に此方よりあれかれと求めるのは非常の間違である、適切に申せば皆さんは、早く信仰を得度い、佛の膝にすがり度いと、此方より待ち受けて信仰を得んとし、綺麗な心になり度いと思つてお出になる。之は全く逆でありませぬ。佛の慈悲は此方より捜すのには無い。實は我々が此方て彼是言うて居るのは、お慈悲の上から言へば勝手な言つて居るのである。此世が苦しいといふのも、畢竟すれば吾身の氣儘を言つて居るのである。其者を佛の方より御覽下され、其者を哀れみ、其者を佛の方より捜し、其者を呼びかけ待ち受けて下さるのである。其の廣大な選擇本願の願心が、大聖矜哀の善巧に催うされて我々の心に届いて下され、あゝ長い間待せて置きました、實に相濟まぬ事でありました」と氣の附いた時が、曠劫以來初めて親の御呼聲が聴えて下された時である。而して此呼聲が聴えて見ると、如何にも廣大なる大御心が難有くて堪えられぬ。即ち歡喜地であつた、此の一念に眞の佛子として頂くのである。自力の修行で座禪をする人が、一點光の見え時は狂氣になつて本來の面目を知つたと喜ぶといふ事である。我々の本來の面目は、罪惡の塊、水火に焼かれ溺らされる處に在る。夫が外では無い、曠劫已來其の我々を哀れんて

著なりとあつて、此の助くるぞよの大悲の御不思議をお受け

の出來ぬ者は、佛智疑惡の行者である。親様は如何に助くると仰せられても、自分如き罪の深い者は中々助けて貰ふ事は出來ぬと思ふのが不堪である。然るに仰の儘が心に届いたのが、即ち信心歡喜乃至一念である。其の一念同時に攝取の心光に照護せられるのが、我能く汝を護らんとお思召である。

儲て斯の如く一念の信心を頂いて、親の御恩が解つた以上は、一代の間稱名念佛して其の御恩を喜ぶのが多念の念佛である。之れ即ち『口傳鈔』の御教化に「他力の信をば一念に即得往生と取り定めて、其の時命をはらうらん機は、いのちのあらん程は念佛すべし、これ即ち上盡一形の釋にかなへり。(乃至)一念を以て往生治定の時剋とさだめて、命のぶれば自然と多念にをよぶ道理をあかせり。」と仰せられた點であります。

前に二河白道の喩には、釋迦彌陀二尊を父母にたとへられたが『行卷』には、光明名號を以て父母に譬へて、一念の信心を生みつけて下さるとある。即ち南無阿彌陀佛の六字は德號の慈父である。無碍の光明は慈母である。此の光明名號の因縁によつて我々の心に、信心の業識を生じて下されたが即ち一念である。然るに此の一念の信心は光明名號の父母によりて生みつけられたばかりで無く、又此の信心を内因となし、光明名號の父母が外縁となつて、育て上げて下さる。我等は父母によつて生みつけられた上に、又父母の護持養育の御恩で生長する如く、我等一念の信心も、八萬四千の光明の懷に攝取せられ、稱名念佛の乳房に育てられ、遂に極樂淨土に往生する迄相續さして下さるのが、即ち自然と多念に及ぶ道理で、

居て下さる如來大悲の御呼聲、本願の親の面目が解つて來れば、身の嬉しさに歡喜せずには居られぬ。『願成就之文』に、其の名號を聞いて信心歡喜すとあるは、即ち此の心持を指示下されたのであります。其の如來の親心の届いた時剋の極促を、乃至一念と申されたのである。之が即ち御法主の指示下された『口傳鈔』の御教化に「眞宗の肝要一念往生を以て淵源とす」とも示し下された點であります。

以上二河白道の喩を引きて長々と申述べた事も、畢竟釋迦彌陀二尊の善巧方便によりて、此の一念を起させて下さる事を申したのである。其の善巧方便は御法主の仰せられた如く、逆縁即ち大悲矜哀の恩寵で有つて、『觀經』の上に現はれた人生の出來事、二河白道の喩に顯はれた四方八面の逆縁は、畢竟西岸上の呼聲に氣を附けさせて下さる、一念の信心を起して下さる爲であつた。此の一念親の御恩の解るなり、親の慈悲の中に攝め入れられて一旦忘れても忘れ切れず、逃げようと思ふても遁げきれぬ境界になつたのが、即ち如來の攝取の光明に攝め取られた有様である。故に『行卷』の文には「十方群生海この行信に歸命したてまつれば攝取して捨て給はず、かゝるが故に阿彌陀と名け奉る。之を他力といふ」と仰せられたのである。又西岸上の呼聲には「我能く汝を護らん」と仰せられたのである。之を『愚禿鈔』には、我とは盡十方無碍光如來なり不可思議光如來なりと仰せられて、大慈大悲の廣大なる親様が我々に對して、我と仰せ下されたのである。能くといふは、能ふといふ事である。如來廣大の御力は如何なる罪惡の者も助け能ふぞといふ事である。不堪に對するなり、疑心の行

上盡一形の念佛であります。

其處で此の後念相續は一念の信心の繰反してある。故に恰も一念の信心が逆縁の善巧方便の恩寵を以て頂かせて貰うた様に後念相續にも又逆縁即恩寵といふ事を忘れてはならぬ。私は此頃信仰以後の生活でも決して清淨潔白なる理想を人生上に實現する事は、出來ぬと氣附かして貰ひました。先達て御法主の御言葉にも「あさなひをもし、奉公をもし、漁すなどりをもせよ、かゝるあさなひもしき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等如きの徒者を、助けんと誓ひます本願」と仰せ下された。如何にも我等は、政治を爲さうが、實業を爲さうが、學問をしようが、教育をしようが、私如きは設ひ法を説きながら、如何にも御教化の如く、淺間しき罪業にのみ朝夕惑ひぬる凡夫である。其處で我々は其淺間しき心を止めようと試みるては無い。其の淺間しき心の逆縁を縁として、大悲の親心に立戻らせて頂くのである。二河白道の喩に信心の白道は常に現はれ通しては無く、火炎來りて之を燒き、波浪來りて之を調ほす如く、貪欲瞋恚の煩惱のために絶へてせらるると雖も、絶へながら逆縁を縁として再び顯はれて下さるのが後念の相續である。親鸞聖人は逆縁が御縁となりて法然上人にお遭ひなされ、立所に他力攝生の旨趣を受得し給ひたが、其後も常に逆縁の引續きであつた。卅五歳迄吉水にお出になる時も諸の誹謗迫害を受け、卅九才迄の御流罪中は申す迄もなく、法然上人の御往生を聞いて流罪同様東國傳道廿年、又しても逆縁ばかりである。大師上人源空若し流刑に處せられたまはずば、我又配所に



告白

趣かんや。若し我配所に赴かずんば何によりてか偏鄙の群類を化せん。これなほ師教の恩致なり。

御法主が逆縁即ち恩寵と仰せられたは、聖人の此の御述懐と符節を合はせたるが如くである。若し此の逆縁なかりせば寒中雪の中に偏鄙の群類を御教化下さる機會は得られぬかも知れぬ。是れ全く大悲の恩寵であるとお喜び下されたのである。

親鸞聖人が法然上人にお會ひなされし事を喜ばれし如く、我々も此の師教の恩致を感謝せねばならぬ。諸佛方便とさいたり、源空ひじりと示しつゝ、無上の信心をしへてぞ、涅槃の如くをばひらさける。實に如來の善巧方便時どり、逆縁即恩寵として斯く御苦勞下さるのである。「直の知識にあふことは、かたきがなかなほかたし」『愚禿鈔』に「眞の善知識とは正の善知識なり、實の善知識なり、是の善知識なり、善の善知識なり、善性の人なり」と仰せられてある。此度私の有縁の眞の善知識に會ひ奉りて感激するの餘り、逆縁即恩寵の御教化を題として喜ばせて頂きました。

或女人云く、今まで底なき御慈悲に底な我方より入れたるが誤也。あな波間敷さま、今こそあきらかに知られたたり。

又云く、御慈悲の水の流れは清くしてダブ／＼して居れども此方から聞へたといふ大きな土手をつきて居る故に、御教化の水がながれこまぬ也。此度は、此方の土手を切て置て、御慈悲を取れば、あなたの御慈悲は小さき胸のうちにダブ／＼といたゞかる也

『秀在語録』

して、三年ばかり病床に就きまして、此の間に煩悶といふ事を知りました。身は今病氣に惱みつゝも、人は名を揚げねばならぬと云ふ感念が強く、其が爲に心に非常の苦み起し、勉強時代を病氣して居ては、名譽は愚か、此の有様では其の日の生活も出来まいと、十年も先の事を心配して、其の中に又脳病を起して、一層の煩悶に陥りましたが、父母は此の長い間一日の如くに世話して呉れ、高田病院に、青山博士に、三浦博士などの治療も受け、漸く十八才の頃から散歩も一人て出来るようになりましたが、中々に世の中に立つ望もなく、只私しの病氣を治して立身させ度といふ両親の一念に對し、厚き御慈悲に對して、服薬して居る次第で御座いました。

世の中に立てぬと諦めては見ましたが、人と生れて斯うした事が中心から諦められる譯もなく、煩悶する程病氣は重患となるけれ共、両親に心配させまいと思ふから、心では泣きながらも涙を押えて時には歌ふてなど居りました。到底人並の身体になれぬものなら今更服薬も止しようと思つたが、又考へて見ると御自身は末であれば代はれる者なら代つて遣り度いと迄に御心配くださる母親の御慈悲に背きも致し、又到底不治の病氣故服薬せぬと申上たら、其御歎きが思い遣られて又自身も歎く、斯かる場合になりますと親の御慈悲は彌々厚く、金の限り盡して呉れますが、商賈に失敗して傾き初めた財産を、僕故に一層失はせ、遂には父母兄弟を路頭に迷はせるのである、自分は不孝者じやと、神經が衰弱するに隨いて益々思は亂れ、悶へ／＼と両親に見せじと奥の一間に入りて泣き、又心配そな父母の顔を見る愁らさに、故意と歌を

理想を求めて信仰を得たり

清水子三郎

佛の御慈悲をア、有り難いと頂ける様にして貰うてから、三年の月日を送りましたが、考へて見ますれば實に永い／＼間佛の御慈悲を氣附かして頂くべき境遇にありつゝ、人を恨み親に背き神も佛もなきものと迄に拗ねて送りし十四五才の折からの事柄と、又今日に至る迄の間誠に難有い日暮をさせ頂きました事を、思い出る儘に記して、私と同じき様な境遇の御方が此れを御縁に信仰に入られることも有うかと、管々しくも勿体ないが尊い求道の紙面を讀まして頂きます。

私しの父母は普通道徳の上では誠に申分のない御方で、他所様の親に比較して實に稀らしい父母であると感じて居りますが、宗教は大の嫌でありまして、却て佛様は縁起が悪いとて話しにするのも嫌つた様な次第で、最も之は我が地方一般の状態で御座いました。

學校時代は佐々蔚といふ先生の教えを受けまして、其の先生が名譽を揚げよ、國に忠に、父母に孝にと、此が人生成功の最高で、人は此れに向つて慕進せねばならぬとの教育でありましたが、十五才の夏、脚氣症に犯かされ、尙心臓に昇進

唄い詩を吟じて慰めようと務めたが、其れ丈親は僕の心を察して尙歎く、果ては互に泣き入つた事も度々でした。斯うした日暮しも一年位で、母に泣かれては一旦止めた薬を又服用し、又煩悶しては薬瓶を大黒柱に叩き付けて母を泣かせた事もありましたが、轉地療養に茅ヶ崎へ行きましてから追々快方に向い、どうやら筆持つ事位出来ましますので、郷里の郵便局に出勤しました。此れも我が儘な條件で這入まして、一日の中に倦めば散歩に出かけ、氣の進む時には事務を探るといふ様な次第でしたが、其れでも追々全快しまして、一年間には敏腕家と譽められる丈に勤め、両親にも喜ばれて月日を送りました。其の中に次の弟が放蕩を初めまして此れが又私しの煩悶となりました。

何うにか弟を改俊させるのが自身の責任でもあり、又両親に隠して遣るのが弟の爲にもなり、尙両親に心配をかけぬ譯でもある様に思つて、放蕩を改俊する事の出来る様にして遣らねば改心する志があつても出来ぬであらうかと、不義理の借財も返して遣り、血を絞る様な金も支出して遣りました。が、却て夫れが爲に放蕩が募り、墮落の淵に深入りさせる種子ともなり、又両親の前へは郵便用の辨用に行くつと繕うては東京へも度々行き、宅を明ける事が度重なり、此れが爲に両親に心配させた事は一方ならぬ譯であります。

右様の次第で實際が偽りであるから、郵便局の用辨に行きたのでない事が両親にも知られ、其れが度重さなると父母は私しが放蕩でもして、其れ故偽言を吐くかの様に思ひ做され、色々と御叱りも受け御心配を掛けましたが、矢張り行かぬば



ならぬ事が出来ては云い繕つて出かけますので、両親は私しの放蕩が益募るかと思配され、母親は泣いて訓められた事もありました。自身が放蕩して居るので無いから或る點に於ては良心の咎もなく氣強い様でもありますが、斯く迄に誤解されて、永らくの病氣が全快したと安心する間もなく、又も斯うした苦勞をさせるとは實に何といふ不孝者であるかと泣かれる愁らさ、心苦しき、斯ういふ様に親に心配させまいと隠せば隠す程向心配させ、力味めば力味程却て泣かせる。全体自分は意氣地がないと、斯んな日暮しに尙煩悶の増した事は、公衆に對して親切に事務に忠實に勉勵すれば世間の評判もよくなりませう。實に世の中は馬鹿げたもので、私しなど當然爲すべき事をして居て評判がよくなり、局長の信任も厚くなる。が他方には其れ丈同僚の先輩との友情が薄くなる、疎くなる、言葉に顯はれる、行爲に顯はれる、其れが御互に慕りて局内は硝煙の中にあるのだ、事務に忠實なれば諂うのだと攻撃され、公衆に親切にすれば八方美人だと謂はれる、茲に至れば世の中は闇だ、善に善果なくて却て惡果が來た、一層同僚の腹に抱かれて背い投げをかけ様かとも思つたが、又思い直しては融和に務めました。今度は先方の心に抱き込まれても和解して見様としたが、遂に畫餅に歸して仕舞うた。畢竟和解しようとする丈先方を敵に見、融和に務める丈惡感情が自心の片隅に隠れて居た。自分は人に對して親切にする、先方は悪くても自身は悪くせぬ積りて居たが、實に淺ましい今日の場合である。敵を愛せよとは實に立派な言葉ではあるが、一方に敵と思ひ他方には愛せよと謂う、此の言葉は實際上には何程

あらうと大喝されました。

嗚呼世の中は實に闇だ、普通の人に爲し得られない迄に盡して、尙此んな逆境だ。世の中は常に惡と善と戦つて、常に善が負けて居る。此んな馬鹿々々しい世に居るよりも、寧ろ監獄に行つたら、又別社會でよからうと思つた位である。其の中に局長代理は某局の局長代理となる榮轉を口實に僕を追出主義に掛つた。

其の某局が奇岩重疊たる山中の僻村で、遞信部内で有名な不整理の局である。又今の場合に轉任したら愈嫌疑は深くなる事と思ひましたが、自身としては唯一の逃げ場である。逆境に重ねるに逆境を以てし、世界廣しといへども僅五尺の身軀一幹の置き所もなく、遂に世に納れられずして、「水清けば魚住まず」と超然として力味んで居たのが、今は厭世觀となつた。今日山中に隠れて大悟徹底でも仕て見る氣にもなり、一番追出主義に陥つて轉任して遣らうと決心して、任地に赴いて諸帳簿に手を入れて見ると不整理も又甚しい。引繼目録も作らずに引受けて呉れとの先方の頼みだ、斯んな亂暴な話でもあるまい。先方の頼みに應じたら如何なる事迄引受けるのであらうか、不整理な局丈に尙更斯んな疑念も深いのである。引受けぬと云へば又一騒ぎ起すのだ。自分は何故斯うした逆境に立ねばならぬのか、正義と不義と戦つて隔執を起し、其の隔執を逃げて又正當を主張すれば隔執を起すのだと轉任して又歎いて泣きながら平和は僕の理想である、自分は泣きながらも人に満足させ度のが私しの理想である、虚偽にもせよ、姑息にもせよ、自分が承知すれば平和である、

の功もない事を自身の今日の境遇に發見した。敵を愛せよとは虚飾である、敵と思ふ人を愛せよとする丈力味心がある、力味心があるから自身は悪くないと思ひ、先方はかり恨む、堰に堰かれた水が岩も突き破ると一般で、以前に増した葛藤となり、遂に同一局内の別室で事務を執る様になつた。心の隔て、居る間は未だしも、室迄隔たる様になつては淺間しさも極點である。一方は斯く迄に冷かであつた私は他方には溢るゝ程下級の人や集配人の同情を受けて居たのである。地獄の惡しさと極樂の嬉しさを一時に味はつた。そうであるから集配人を煽動して同盟罷工を企てても居る様に、同僚の人には影口された。四面楚歌の聲である。右の次第で友情の厚い人とさへ交際も出来ぬ場合となりまして、實に心中一點の光明もなき上に、百圓の小切手入りの書留郵便が紛失しまして、其の嫌疑が私に掛つて來た。無理もないので、書留郵便取扱主任が私であつたから、両親も私の所爲なら速に自首して出る、警察に煩勞させるは一層罪の深かい譯である事を訓へられる位であるから、世間も私と疑つた。其れでも事實に勝つ證明はあるまいとの確信があるから、疑はれても敢て辯解もしなかつたが、遂に局内の一人が自白して其の人が收監されて私しの證明も立ちました。其の人も證據不充分で歸宅された。此の人が又佛様のような方で、豫て警察へ二人で呼ばれた時も、係り官が私に向つて此の人が盗んだと思ふかと尋ねられましたが、私は飛んでもない事、此の人は佛様のような人で盗みなど成し得る人でないと申しますと、其れなら其の當時二人しか居なかつたのであれば、其の方の行爲で

遂に目録もなく一切を引受けた。友人知己は榮轉を祝して手紙を呉れる、其の手紙に接して又泣いた。他人は昇進と祝して呉れるが、僕自身は流刑に處せられたのである。正義と不義の戦に破れて、敗軍の大將は浮世に遠き山中に隠れたのだ。けれ共一瀉千里の勢で整理に掛り面目を一新しようとした、山中の郵便局など實に昔の飛脚屋と撰ぶ處がないのであります。

今度は又局長と衝突しなければならぬ場合が出来たのは、一面には面目を一新しようとする務める、他方に罪惡を默過し、又自身が犯かさねばならぬ様になつたが、此の間に『信仰の餘瀝』を讀んだ事も實に幾度であつたか知れぬ程反復した。けれ共佛の御慈悲を疑つて居たから信念が起らぬ、其れであるから煩悶が重なるので、自身は信仰を得たい、安心して日暮をしたいと常に思つて居たが、一つは習慣の現世の利益を佛の御慈悲と思ひ做して居た。此んなあやふやな精神で居たから、一層罪惡を知らぬ顔で居れば世の中といふ成功が出来るが、反抗すれば荆棘の上に座する思で日暮する上に、成功も出来ぬ。到底闇の世の中だ、蒲團の上に坐つて牡丹餅を喰うかと考へたが『信仰の餘瀝』を見て罪惡觀に這入つては其れも出来ぬ。儘よ畑の中にも三年の蟄へもある。此れ迄遣つて來て今更不義の徒の前に頭が下げられるものかと、平和を理想として居ながら一面は奮闘の日暮してある。此の間に弟は又放蕩する、其れも今迄は両親と弟の間に足らずながら自分が居りましたから、父母に心配させなかつたが、今日は父母は弟の爲に心配される、心配させるのが自身の力が足らぬ



からだ又歎いた。其の上に聞けば又家兄が放蕩して居るとか、兩親の心を思ひ遣つては實に涙の外はない。遂には弟を恨み兄に怒り、悶へに悶へて自暴自棄も起した事もあるが、又僕迄が斯うした有様と聞いたら兩親の嘆きは如何計りてあろうと、泣きながらも強勵した。今は兩親は僕に期待する外ないとの手紙を見た時の淺間しさ、此んな意氣地ない自分に頼寄られる其の心根が實に斷腸の思ひである。斯んな有様で事務に忠實なれば局長に反し、局長に従へば正義に反す、而して此の渦中を逃れんとすれば兩親を又泣かせ、尙弟の學業も中途に止めさせねばならぬ。

嗚呼先生の『信仰の餘瀝』が無かつたら、僕は罪人（此れ等の罪は法律上にあらず宗教の罪なり）と成つて迄成功の駕に乗つたのであつた。

僕は突然と死を決した、自殺を企てた。又此の場合に立つて成功を急かす、正義と不義の戦に能く敗けたと物堅い兩親は褒めて呉れ様と思つたが、兩親が外の兄弟に成り替つて立派になつて呉れ、其方より外に期待する者がないとの御心に背いて、一層の嘆きをさせる事に泣いた。短銃を咽喉に當て心臓に當てた事がいく度もあるが、此の世に安心して生活する事の出来ぬ人間に、何んて安心して自殺が出来ようか。されども死は唯一の慰安であると思つた。四月十日遺書を認め其れとなく兩親や兄弟に袂別してと、住地を出發して郷里羽村に來た折柄、先生が御出張になつて佛教演説があるとの事を中里君に聞いた。自殺するにも迷うて死するより、悟つて死に度いとの心から演説を聞いた。先生が監獄の説教中の

であつた。其の佛陀に救はれて今尙感喜に送らして頂けるの

で御座います。佛智不思議なる哉。此れが讃嘆せず居られ

ようか、感謝せず居られようか、慚愧しず居られようか。

敵であつた小作君や、並木君は逆縁の大恩人である。弟も、

僕に悪くされた友も皆恩人であつた。斯うなると泣き暮した

日暮が感謝の日暮してある。四隣暗濤として四面楚歌の聲で

あつた世界が、實に花の世界となつたが、廿日ばかりて又一

事件が出来て、勿体なくも御慈悲を忘れて自力で苦しみました。

其れは兄が郷里へ妾宅をかまへた事で、父からの手紙に

より歸宅して見ると、父は色青さめ、嫂は泣き、母は歎き、

既に親子も別れ／＼にならうと迄になつた。自分は此の時六

日六晩泣いて兄に忠告した。兄も泣いて呉れるが改心して呉

れぬ。が嫂も實に感心な事で、夫の放蕩や不人情は恨まずに、

兩親の歎きを見るのが愁い。此れも私しが夫に對する務が足

らぬからだと泣くではないか。嫂の心を思ひ遣り、兩親の歎

きを押し計り、僕の心の愁さも一通りてない。六日六晩泣い

て意見しても改心して呉れず、遂に兄も涙の中に一ヶ月三晩

妾宅へ行く事を許して呉れと言ひ出したが、何んて私しに承

知が出来ましよう。つく／＼歎いて世の中に悪縁があらば此

れが悪縁であろうと、嫂も又泣いた。嫂は泣きながら妾が承

知して諦らめて居れば、兩親にも歎きをかけず、其れで此の

場が丸く納まるなら、妾は承知しますと瀧の様に涙を流して

言はれ、兩親へは改心したと取り做して呉れと頼まれた。此

の一言には鬼も泣かずには居られぬ。兄も嫂を拜んで泣いた。僕も任地の事務もあり永く留守にも出来ぬから、兩親へ取做

事で、一青年が親に金の無心する愁さに爲替を盗んだので、親に遠慮して盗みするのが父母は嬉しいか、何うかと話された。親に遠慮、親に遠慮、自身は親に歎かれる愁さに自殺するのである、兩親に遠慮して更に大なる歎きをさせるのだ、と斯う思い付ては居ても立つても居られずして、遂に演説中ではあるが自身は家に逃げた。一夜泣き明して母親に病氣したかと聞かれる程顔色も悪かつたそうなる。先生を旅宿の二階に訪ねて、考も分別もなく事情を打明けましたが、先生は大に同情されて後に、あなたは親に歎きを見せまいと務めて大に歎かせ、理想を實行しようとして倒れたのである。何事も佛の御計らひである、佛の御慈悲がなくては何一つも出来ぬと、佛の御慈悲の限りなきを讃嘆されて、今自身が自殺しようとして助けられたも御慈悲であると話された。此の時は先生が佛様の如くに拜まれて、譯もなく膝の冷たくなる程涙を流して泣いた。

嗚呼佛智不思議、先には『信仰の餘瀝』の爲めに苦しみ、今又自殺しようといふ一刹那に救はれた。仍ち住所に再び行き、以前に變らぬ境遇に處して御慈悲を喜びつゝ、執務した。

願みれば永い間御佛の御慈悲を頂きつゝあつて、却て苦しみ自殺しようとした事が四回ばかり、いつも御兩親の御慈悲に引き止められた。其の間苦しさに堪へずして耶蘇教に救はれようとして牧師を羽村へ引き入れました。其の反抗が並木君や小作君の敵愾心となり、佛教を初めて先生を中心に（先生は一切の事情を知らず）反抗された。此れが只今の羽村の求道會の起りてあります。其の仇敵、自身には佛教は當の敵

し嫂へ詫びて任地に赴いた。

晝酒山門禁入と偽る末世にも、御佛の御慈悲は眞實である

が、兄を恨み最後に佛智の不思議も疑うて自力に陥つた罪深

き事に氣附かして頂き、此の罪深き私しも攝取せられずば正

覺を取らじと誓はれた本願が誠に／＼難有く頂いた。佛智の

不思議は實に思議すべからざるもので、六日六晩意見して改

心されぬ兄が、到底駄目と諦めた時に改心して呉れたのであ

ります。其れが女は遠國の者であつて、又其の女が逆境に立

つて、自暴自棄の結果羽村へ來ましたので、兄も其の女に同

情して、何うにか人間にして遣り度との心がいつか迷うて、遂

に日陰者の妾と迄墮落させたのであるが、兄が此の事に氣附

いて其の女を助けて遣らうとて却て墮落させた罪を詫びて女

のように思つた。其の後一年ばかりて兄は夫婦で東京に住居す

る様になり、私が家に歸つて父母の傍にありて父の請負業を

仕て居りますが、多數の勞働者を使役して居るので、其の間

の出来事、又は交際上の事、何一つ嘘ならざるはないが、

又自分も同一徹である。そら事たはごとの世なればこそ、佛

のみぞ眞實である、念佛のみぞ末とほりたる誠である。自分

の眞實ならざる丈、自身が煩悶多き丈、佛の清淨願心の誠が

難有い。開黒の世なればこそ佛陀のみ光明である。御慈悲な

くては一日も生存も出来ず、善巧方便なくば何一つ出来ぬ

のである。尙味はして頂いた御慈悲も數多あるのですが、他

人の人格にも關するので、他日御縁ありて告白して頂く時、

又詳しく記さして頂ましよう。



小慈小悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ、  
如來の願船にまよはずば、苦海をいかでか渡るべき。  
蛇蝎奸詐の心にて、自力修善はかのうまじ、  
如來の廻向をたのまては、無慚無愧にてはてぞせん。  
超世の悲願聞しより、我等は生死の凡夫かは、  
有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ。

聖傳

デヤードカ釋尊傳

第十 愛の毒矢

昔マガダ國の王ベナレスを治めし時なりき。收穫の季節毎  
に多くの鹿は殺されぬ。されば此時鹿は麓の林に逃るゝを常  
とせり。

茲に一つの牝鹿ありけり。人里近き邊よりさすらひ來りし  
牡鹿と親しみぬ。牡鹿は牝鹿の山を下りて深き叢に歸らんと  
せし時、愛の係蹄にかゝりて別かれかね、共に行かんとせり。  
牝鹿は彼に向ひて「汝は此あたりの鹿ならず、案内しらぬ  
處を行かんは、いと、危険なれば、此處に止まれよ」と云ひぬ、  
されど牡は牝を甚く愛慕し共に行きぬ。

マガダの人々は鹿の小山より下るを見て、道のほとりに隠  
れて待てり。恰かも此二疋の歩める藪の後に獵師は立ちぬ。  
若き牝鹿は人の香を嗅ぎ、直ちにそれと悟り、牡を先にして  
己は後に立ちつゝ行きぬ。果せる哉獵師の射たる一矢は見事  
に牡を其場に倒したり。牝は牡の倒れしを見て風の如くに逃  
げ去りぬ。

獵師は現れ出て、忽ち鹿の皮を剥ぎ、火を起し、燃え立つ  
炭火にて甘き肉を料理したり。食ひつ飲みつ、樂しき時を過

『香々院語録』

一、人に佛法の事を申して、其の相手が難有いことと云ふと云ふ  
て喜ばれたならば、其の相手の人の喜ぶよりも、其の佛法のこ  
とを申し聞かせた人は、猶ほ喜ぶありがたやと喜ぶべきぢや、  
相手の人が信心を得て喜ぶのは、我が教へたからと云ふてはな  
い。彌陀の佛智を傳へて云ふたのゆへ、人が斯様に喜ぶのぢや  
と思ふて、そこで人が喜ぶを見て、自分に佛智の方へ振りかへ  
りて、佛智をありがたく思ふべきなり。  
一、田の仕事も山の仕事も、さつぱりしまつて遊んで居る間に、  
佛法を聽聞せやうと思ふは淺ましきことなり、今日とも知れず、  
明日とも知れぬ命なり。風が吹けば消へると知るべし。  
一、彌陀の六字の名號は、諸佛の名號と異りて、諸佛の名號は  
南無藥師如來ても、南無大日如來ても南無は衆生より歸した時  
ついた南無なり。今彌陀の名號は南無の二字迄も、十劫の昔彌  
陀の方に成就し給ふ故に、衆生阿彌陀佛後生助け玉へとのむ  
のも、全く神力より廻向し給へる信心なり。されば六字の名號  
は、彌陀より十方衆生を招喚し給ふ勅命なり。

せし後、彼は残りそば血汐したる儘に携へて、我家の子等  
に振舞せんと歸り行きぬ。

「此時、菩薩は樹の神となり其森に住みたり。彼は此慘膽  
なる様を見て一人言ちたまへり。

此哀れる愚の鹿が死に至りしは、唯色欲の爲なりけり。  
情の曉方には幸多しと思へど、遂には彼の四足を失なひ、練  
め打たるゝ等あらゆる苦痛を嘗めざるべからず。世に耻辱は  
多けれど、他の者に悲歎や死を與ふに勝るものありや。實に  
女性は罪多し、女子の政權を握る國より賤しきは無し、又女  
子に捕はれたる男ほど、見苦しく哀れるはあらじ」とて  
人の心を裂き破る、いと怖しの愛の矢よ！  
女子が政を左右する國は愚の國なるぞ、  
女子の力に捕はれし、男は哀れの者なるぞ。  
と三句の偈を唱へしに、森の神等は花環を菩薩の前に散布し  
て褒め稱へ森は歡呼に鳴り渡りぬ。

第十一 食を貪りし鹿の話

此は世尊ジエタバナに在りし時、食物に就きて戒をよく守  
れる若者テツサに關して語りたまひし事ありき。

佛一時、竹園に住したまひし時、テツサ王子と呼べる著る  
しき、富者の若者、世尊の説教を聽き、菩提の道に入り、僧  
たらん事を欲しぬ。此事を父母に告げて、免を乞ひしに、父  
母は是を拒みぬ。彼は遂に七日の斷食を行じて、強いて親の  
免を得、世尊の得度を受けたり。

世尊はテツサ得度の後半月ばかり竹園に在りて、ジエタバ

ナに行き給へり。此處にて若きテツサは日々乞食しつゝ生活  
し、種々の修行により、食欲を静めぬ。されば「食物につき  
て戒を守るテツサ」として佛の教團中名高くなりぬ。

折しも、ライジャガには人々宴を催しぬ。テツサの親は  
彼が俗人たりし時、著けたりし寶石の類をば、銀の箱に入れ、  
有りし事共忍びつゝ、涙に暮れたり。曰ひける様「嘗て我等  
の子は此寶石を飾りて宴に連なりしが、今は罽曇なる比丘彼  
をサバツチに連れ行きぬ。我等は彼が今後如何に成り行くや  
らん、知らざるなり」と。

時に或奴隷の娘此家に来りぬ、妻女の泣き悲しむを見て、  
其故を問へり。彼女は事の次第を聞き終りて曰はく、「さらば  
貴女よ、汝の息子は何の皿を最も好みしや」と。

「かくくの皿を」と答へぬ。  
娘は「若し妾に全權を委ねたまはと、妾汝の息子を連れ歸る  
べし」と慰さめぬ。

貴女は是を諾し、費用をば悉く拂ひて、多くの供者を伴は  
しめ、娘をサバツチに送りたり。

娘は輿にてサバツチに行き、僧の常に托鉢すと聞きし町に  
宿を求めぬ。かくて彼女は長老の來るや、飲食等を與へて、  
彼を饗應したり、日數ふるまゝに漸く親しみて、よき頃ほひ、  
彼女は長老を家に坐せしむるに至れり。而して彼女は僧が全  
く食欲に捕はれて、あのれの欲する儘になりしを見、病と稱  
して内房深く垂れ籠めぬ。

一日僧は托鉢の時來りしかば、彼女の家の前に至りぬ。一  
人の侍女内より出て來りて鉢を取り僧に坐せん事を乞へり。



彼は坐する間もあらせず、問ひて曰はく、「貴女は如何にせしや」と。

「彼女は病なり、貴き師よ」と答へぬ。僧は食欲に食れて、知らず一日頃の教をも戒をも打忘れ、娘の横はれる室を見舞ひたり。此時彼女は僧に對して、懇に、如何にして彼女の此處に來りしやを語り、種々に饗せし後、遂に法を捨て、再びラージャガハに歸らん事を説得したり。かくて娘は己の力のまゝに、チツサをば輿に乗せ、外くの供者を引具してラージヤガハに歸りしとぞ。

此は忽ち風評高くなりぬ。僧等は説教の堂に集りて、互に語りて曰く、「奴隷の娘は食物に就きての戒行堅固なチツサとまで稱せられし彼を食欲にて捕へ去りぬ」と。此時世尊は堂に入り法座に着き、「如何なる事を語りつゝありや」と問ひたまへり。

彼等は風評を有るが儘に告げ奉れり。

「今世のみならず、前世亦チツサは食を貪りて捕はれぬ」と宣ひて、次の譚を語りたまへり。

今は昔ベナレスの王ブラマダッタにサンジャヤと呼べる園丁ありけり。或日いと素早き大鹿、園に入り來りしが、サンジャヤを見るや飛ぶが如くに逃げ去りぬ。サンジャヤは敢て是を驚かさず、何の害をも加へざりければ、再三來りし程に馴れて、鹿は園を歩み廻るに至れり。園丁は園に咲き香ふ花や實れる果實を取りて、日々に王に捧げたりしが、一日王は、サンジャヤに向ひて、「園に珍らしき事を見ずや」と問へり。「余は何物をも見ず、唯一つの大鹿、園に來馴れ、そこ、こ

世尊は是を語り畢りて、曰はく、サンジャヤは奴隷の娘にして、鹿はチツサ、ベナレスの王は我身なりきと。

### 第十一 學ばざりし鹿の話

世尊ジエタバナに於て一日 汚なき、僧に説きたまへり。此僧は偽言を曰ひ、些かも人の教へ戒むる處をば聽かざりき。

されば世尊は彼に曰はく、「比丘よ汝は妄語を吐き、人の戒を聞かずと云へるが實なりや」と。

「そは實なり世尊よ」と云ひぬ。

「嘗て亦汝は賢者の教を聽かずして、係蹄にかゝりて、亡びぬ」とのたまひて、次の譚を語りたまへり。

昔ブラマダッタベナレスに王たりし時、菩薩は鹿となりて、一族數多を従へつゝ森に住みぬ。

一日彼の姉なる鹿己が子鹿、を彼に托して、鹿の法を教へん事を乞へり。

菩薩なる鹿は子鹿に「何時何日來れ、我は汝を教ふへし」と告げぬ。

されど子鹿は、定められし時に行かずして何時も欲するまゝに遊びけり。菩薩は七度までも戒めしかど彼は毫も聞かざりき。或日子鹿は山をさまよひしに一つの係蹄にかゝりぬ。かくとも知らず、彼の母は、弟鹿に行きて、「我子は鹿の道を學びたりや」と問ひぬ。

「否、彼の如き改め難き者を顧る勿れ、汝の子は些も學は

をさまよひ歩けり」と答へぬ。「汝を其を捕へ得るや。若し少量の蜜を得ば余は宮の内まで伴ひ來るべし」と云ひけり。王は彼に蜜を與へぬ。サンジャヤは蜜を持ちて園に行き、鹿の屢々來る邊の草に塗り。己は隠れぬ。やがて鹿は來りぬ。蜜塗りし草を食みて行きけり、是れより、鹿は全く食欲に食れて、其後は何方へも行かず、唯、此處へのみ、常に來りぬ。園丁は鹿の蜜つきし草を食るを見善き程に身を現はしぬ。鹿は始の程こそ、驚ろきて、身を躍らしつゝ逃げしが、遂には全く馴れ睦びて、サンジャヤの手より蜜の草を食ふに至れり。かくて數日の後、園丁は園より宮に通ずる道をば悉く、葉や小枝にて敷きつめ、おのが肩には蜜を、腰には草をつけて、鹿を伴ひ、蜜の草を撒きつゝ宮の内までも彼を引き入れぬ。かくともしらぬ鹿は何時しか家の内に入りしに、戸は忽ち閉ぢられぬ。彼は人を見て震ひおのゝき死ななばかりに怖れ、あなた、あなた、逃げまはりぬ。王は是を見て、「人を見し處へは數日行かず、又驚ろきし處へは、生涯行かざるは鹿の性なり。如此人を怖れて叢にのみ住馴れし彼が食を貪る餘り、かゝる處へ來りしなり、實に恐ろしきは貪欲たる哉」と曰へり。

貪欲よりも悪しきなし、家に在りても他と居ても、食を貪ほり、野の鹿が

サンジャヤの手に落ちにけり。

彼はかくいひつゝなほ人々にも貪欲の惡しき事を述べ、遂に鹿をば森に放ちやりけり。

「と云ひ、彼亦教ふる事を欲せずとて偈をいひぬ。

此上なく早き鹿にても、

枝に枝ある角もつも、

七度、教きかざれば、

彼をばもはや教へまじ。

と歎じぬ。

獵師は係蹄にかりし鹿を見て直ちに皮を剥ぎ、肉を取りて行きけり。

子鹿とは汝口汚なき僧にして、其母はウツバラヴァンナ、戒めし鹿は我なりきと宣へり。

### 第十二 賢き鹿の話

一時世尊バダリカに在し、時、佛の息子ラーフラが法を學ばんとして苦心せるを見給ひ、一つの因縁を説きたまへり。

昔マガダの王ラージャガハに在りし時、菩薩は鹿に生れ一群の鹿を従へ、森に住みぬ。

一日彼の姉鹿おのが子を伴ひ來り、そを教へん事を乞ひて菩薩に彼を托しぬ。

弟鹿は快く諾ひて曰く「何時何日來りて我の教を受くべし、とて子鹿を歸しけり。

子鹿は指示されたる時を違へず來りて熱心に教を受けたり。一日彼は森を遊び居りしに係蹄にかゝりぬ。一聲高く叫びて隣となりしを仲間告げぬ。鹿の群は此叫を聞き母鹿の許に馳せ行きて今や子鹿の係蹄にかりしを告げたり。母鹿は



弟鹿にゆき、

「弟よ我子は鹿の道を學びたりや」と問ひたり。

「汝の息子は鹿の法をばよく學びたり。彼に過失ある事を恐れされ、今に歸り來りて、歡の爲に汝を笑はずべし」と云ひて偈を稱しぬ。

我は子鹿を教へたり、

疾く走るべく、夜にのみ

水を飲むべく、種々に

姿態を作りて形變へ、

地に隠れては一方の

鼻孔のみより呼吸すべく。

我甥鹿は命により、

六種の計を弄しつゝ、

敵に鼻をば明かさしむ。

かく菩薩は如何に彼が諸種の術に通ずるやを語りて、姉を慰めたり。

子鹿は係蹄にかゝりし時、些かも悶へざりき。

唯出來る限り地に横はり、脚を差出し、蹄にて間近の地を蹴りて土や草をはじき、頭を地に附けて舌を出し、體をば、

唾液にて濕はし、下腹を突出し、下部の鼻孔にてのみ微かに呼吸したり。全身硬ばりて、恰かも彼は死屍の如く見えたり。

青蠅あたり群がり來り、そこ、こゝに鳥止まりぬ。

獵師來りて胃のあたりを一打して、つぶやきける様、「こは朝かゝりしと見ゆ、最早や腐敗すべし」とて、彼のくゞられし繩をとぎ、何の考もなく、柴を集めて火を起したり。

暗と明とのわかちなく、  
風吹き渡る時つも  
寒さは來なり。寒さとは  
風のなすわざ、されば今  
汝の言ふは共にまことぞ。

世尊は此話を畢りて因縁を説きたまひぬ。曰く虎は暗にして獅子は明なりき。而して隱士は我なりきと。

### 第十五 犠牲

此譚は世尊ジェタバナに於て語りたまひぬ。當時人は「死者の宴」と云ひ一族の病める者の犠牲として羊、山羊の類を數多殺したり。僧等々々のかく爲せるを見、世尊に參りて、申さく、「主よ、人々は所謂「死者の宴」に供へんが爲に多くの生物の命を奪ひつゝあり、主よ、是は恐らくは何の利かあらん」と。

師曰はく「我等は死者の宴を行ふことなからん、生物の命を取るに何の利かある。嘗て、聖者等は空に座して其が惡しき事を説き、ジャンブダイバの住民に惡行を止めしめたり。されど今流轉輪廻の後再び其蠻行は起りぬ」とて一つの譚を語りたまへり。

嘗てブラマダツタペナレスを治めし時三の吠陀に通ぜし、世にも名高き學者ありけり。一日死者の宴をせんが爲に一つの山羊を曳き來りて徒弟等に曰ひけるは「我子等よ、此羊をば川にひき行き洗ふべし、而して其が頸の周に花環を懸け一握斗りの穀物を與へて殺せし後、我に持ち來るべし」と命じ

忽然として鹿は立てり、身を一振して頸を延し疾風の如く彼の母に歸りぬ。

師は此説教を終りて因縁を結びぬ。彼甥鹿とはラーフラにて母はウツバラヴァンナ、叔父は我なりき」と。

### 第十四 風

世尊ジェタバナにおはし、時二人の比丘に告げられき。傳へ聞く、彼等はコサラの國に於て深き森の中に住し、一人を暗と呼び他を明と呼びぬ。

或日明は暗に問ひて曰く「兄弟よ、何れの時寒さは來るや」と。暗は半月に於て「暗は答とへぬ。されど又一日暗は明に問ひて曰く「兄弟よ、何れの時に寒さは來るや」と、「明るき半月に於て」と明は答へぬ。

彼等はかく要領を得ざる事共を云ひ争ひて實の理を分さがたかりしかば遂に世尊の前に來りぬ。恭しく佛を禮し奉りて

彼等は問ひ奉れり。「世尊よ、何れの時寒さは來るや」と。

佛は此問を聞き終りて曰はく「比丘よ、汝は嘗て亦此不審を懷しかば我汝が爲に説き、然るに輪廻の間に混亂して遂に忘れ果てしなり」とて、一の話の説きたまへり。

昔獅子と虎の二疋、小山の麓なる或洞穴に住しけるが、菩薩は同じき山の麓に隱者として法の道を辿りき。

或日彼等二疋の獸は寒さといへることより爭論を起しき。

虎は「暗き月の半は寒なり」といひ、獅子は「明るき月の半は寒なり」といひぬ。かくて互に難題を解しかねしかば、彼等は菩薩に問ひ奉れり。隱士は爲に偈を教へぬ。曰く、

山羊は彼の前世の惡行の報今や我身に廻り來らんとするを見、思へらく「今日我は大なる災より逃るべし」と心に歡喜して壺を打割りし如き響を發しつゝ大笑しぬ。而して又曰はく「波羅門は我を殺して、亦我が嘗て得たる如き業報を受けんとするや」と。彼を憐愍して高き聲にて泣きたり。

若き波羅門は羊に向ひて曰はく「友なる山羊よ、汝は心より笑ひ又心より高く泣きぬ、如何なる事を笑ひ、又如何なる事を泣きしや」と。

「我は汝の師なる波羅門の前に於て答ふべし」と羊は云ひぬ。弟子等は彼を曳きて師の前に至り此事を告げたり。師は話を聞きて羊に向ひて「汝は何故に泣き又何故に笑ひしや」と問ひぬ。

此時羊は彼の力にて前世にありし事共を思ひ浮べて曰ひ出でける様「波羅門よ、嘗て我は亦波羅門の一族に生じ吠陀の學者となりき、而して死者の宴を行せんが爲に一疋の羊を殺しぬ。かく一疋の羊を殺せしが爲に我は一生を除く他五百生の間悉く我頭を切られたり、今生は五百生の最后なり。されば今ぞ永き惡業の流轉生死を離るべしと思へば、歡喜置く能はずして汝等が聞きしが如く笑ひたるなり。又泣きしは、我が唯一疋の山羊を殺し、より五百生の苦を嘗めし其にひとしき業報を望多き波羅門の子等が受けんとするをばもへば、

今我苦界を離るゝ樂しさに引換て、悲に堪へざるなり」と。

「怖るゝ勿れ羊よ、我はもはや汝を殺さざるべし」と彼は曰



ひぬ。

「波羅門よ汝は何を曰ふや、汝の我を殺すと否とに關せず我は今日死を逃るゝ能はず」。

「されど恐るゝ勿れ我は汝を保護し、汝に近く歩むべし」  
「波羅門よ、汝の保護は何の所詮もなし、我なせし悪行は力強くして大なり」。

波羅門は羊を慰さめて曰く「我等は誰人にも此羊を殺さしめざるべし」とて、彼の徒弟等連れ羊と共に歩み行きぬ。羊は自由になりしや否や、頸をさし延べて邊の岩根に生ゆる草を食み始めぬ。折しもあれ電光ひらめきぬ。そは岩の頂に落ちしと見る間に岩の一片は破裂して今しさしのべたる羊の頸を切り落しぬ。人々はあたりを群り來りたり。

此時菩薩は其場に繁茂せる樹木の精なりき。神通を以て彼は群集の前に於て空に跌躍しておもへらく「此等の人は罪の實がかゝる業報を受くる事を覺るべし」とて、妙音を發して此偈を唱しぬ。

惡を犯さば後にまた  
苦の生を受くべしと  
人々心に會得せば  
人は生物殺さされ  
殺さば必ず苦しみて  
罪業深き生を經ん  
かく大聖は人々に地獄の苦を示して威喝しつゝ眞實を説き給ひぬ。  
人々此教誨を聞きし時死の怖もて震へ、殺生を止めけり。

菩薩は人々を説きし後善き生を經たりき。人々亦菩薩の教を守りつゝ布施を行じ、善を行ひ、市は神の國の如くなりぬ。世尊は此説教を畢り、因縁を説きて曰はく、「樹木の精は我なりき」と。

加賀の橋爪屋甚右衛門曰く。私は頼む計りの御助けと聞いた上にも、まだ外にありがたき事もある様に存せられまするからして、折り／＼はどうか外を尋ねる様な心も起りますからして、さて之れは勿體なひとあやまりはてし念佛を申しまするが、如何て御座ります。

講師曰く。よく／＼思へば此の悪人が、念佛申す程有りびたひことば無い。喩へば駿河の富士山と加賀の白山と、一つ所へ寄り合ふ事はあるとも、悪人凡夫の両手を合掌して念佛する、とは、また夫れよりも難いとある。夫のものが手を合せ念佛する様になりた種、ありがたひことば無い。依りて法然聖人の御言葉に、光明よりも紫雲よりも、昨日も今日も南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と稱へらるゝがありがたひと仰せられた。然れば念佛の稱へらるゝがありがたひ最上なり。

「香月院語録」

講義

歎異鈔

第十一章

近角常觀

一文不通のともからの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、また名號不思議を信ずるか、いひおどろかして、ふたつの不思議の仔細をも分明にいひひらがずして、ひとのこゝろなまどほすこと、この條かへすゝもこゝろなまどほすこと、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、たもちやすく、となへやすき名號を案じだしたまひて、この名字となへんものを、むかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大慈大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて念佛まうさるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじらざるがゆへに、本願に相應して眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議を信じたてまつれば、名號の不思議ひとつにしてさらしなることなきなり。つぎにみづからのはからひをさしほさみて、善惡のふたつにつきて往生のたすけは二種におもふは、誓願の不思議をばたのますして、わがこゝろに往生の業をばけみて、まうすところの念佛をも自行になすなり。このひとは、名號の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども遊地憍慢疑城胎宮にも往生して果遊の願のゆへについに報土に生ずるは、名號不思議のゆへなれば、たゞひとつなるべし。

前九章なれど、正しく歎異鈔と名のつく所以のものは後九章に一々異義を擧げて歎き正さるゝ點にあるのである、そして第十章は總括して無義を以て義とする念佛に對してはからひを挿み、異義を云ふなどあるまじきことを述べたまひて、此章より、一つ／＼其異義を擧げたまふのである、かく言へば前九章と後九章とは關係なきかと云ふに決してそうてはな、畢竟積極的に言ひあらはすのと消極的に言ひ顯はすとの區別にして、後九章に擧ぐる異義の異義たることの明らかにする標準たるべき聖人直々の御言が前九章である、心を止めて拜讀するに前九章の御言に應じて、後九章の異義及之に對する歎異鈔著者の了解があらはれてくる、これは大體何人も氣付くことながら、細かに注意せば一々相應するかの如くに思はれる、これは當然のことにして當時の異義を歎きて筆をとらるゝ已上は積極的に云ふも消極的に云ふも自然に同じ所に陥るは尤のことである、其大體を概言すれば先づ第一章に彌陀の誓願不思議にたすけられて往生をとぐるなりと信じて、念佛まふさんとおもひたつ心のおこるときすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなりとあるに對して、此章に先づ誓願不思議名號不思議の區別をたつる異義を歎きたまふのである、しかも誓願不思議を信ずると念佛を稱ふるとは決して別つべからざることを第一章に適切に言ひあらはしたまふのである、而して第二章に至りては猶聖人の御了解として、親鸞におきては、たゞ念佛して、彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり云々念佛はまことに云々彌陀の本願まことにおはしまさ



ば云云とつねに本願をはなれぬ念佛なることを示したまふと十二分である、而して十一章に至りて當時の異義を挙げ來りて、誓願不思議と名號不思議とを別にすることを厳しく誠めたまふのである。又次に第二章にしかるに念佛のほかは往生のみちをも存知し、また法文等もしりたるらんとこゝろにくくおぼしめしおぼしはしましてはんべらんはおぼきなるあやまなり、もししからは、南都北嶺にもゆゝしき學生たちおほくおぼせられてさふらふなれば云云、とあるは深き意味なき様なれど、第十二章の經釋をよみ學せざるともがら往生不定のよしのこと、乃至學問をひねとするは聖道門なり云云とあると應ずるが如し、又次に第三章の善人なほもて往生をといひはんや惡人をやは、恰も第十三章の彌陀の本願不思議におはしませばとて惡をおそれざるはまた本願ほこりとして往生かなふべからずといふこと、同意にして罪惡救濟の極所、惡人正機の骨髓を示されたるもの、強て附會せば前九章と後九章と各照應するが如く解することも出来るほどにみゆるのである、されどかくあまり切り整へて考へんとするは無理が出来、されど仔細に考ふれば意外に其意味の聯絡が貫通してある。後の章に「攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる罪業をおかし、念佛まうさずしておはるともすみやかに往生をとぐべし」とか「廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさまにいのちつさは、攝取不捨の誓願はひなしくならせおはしますべきにや」とかいふ言は、皆第一章の所謂攝取不捨の利益の意味が到る處に貫通して居る、一々挙げ來らば綱の目を引くが如く全篇相連りて動くことになる、これ信心其物か

二種の異解に概括してある。一つには、誓名別信計、二つには、專修賢善計である、誓名別信計とは、名號不思議では行かぬ、誓願不思議を信せねばならぬと云ふ點に力を入れるのである、そこで自然聞きわけ、知りわけて能く理解が出来ぬば不可と云ふ事になる、それ故に結局學問せねばならぬと云ふ計を生ずるのである、次に專修賢善計と云ふは賢善精進の相を現じて念佛せねばならぬと云ふ異解である、それ故結局惡をなしてはいかぬ、立派なる行をせねばならぬ、殊勝にせねばならぬと云ふ計を生ずる様になる、此二種の傾向は信仰が律法主義に陥る時は常に生ずる處のものである、こは古今の宗教歴史に同じ轍を踏むものである、波羅門教の如き吠陀を始めてして結局哲學風と苦行風とに陥つて居る、釋尊は是等の戲論と苦行とを排して涅槃の實驗を説き給ひたのである、又猶太教にては結局パリサイサトカイの學者及び、律法者の僞善を排して愛のクリスト教が起つたのである、抑々信仰の生命が枯渇してくれば自然自力に陥つて學者風殊勝風になるのである、故に誓名別信計は結局學者念佛となり、專修賢善計は結局殊勝念佛となるのである、是故に第十二章には經釋をよみ學せざる輩往生不定のよしのこと、此條すこぶる不足言のことといひつべしと云ひて學者念佛を戒しめ、第十三章には彌陀の本願不思議におはしませばとて惡をおそれざるは、また本願ほこりとして往生かなふべからざると云ふこと、此條本願を疑ふ善惡の宿業をこゝろをざるなり乃至持戒持律にてのみ本願を信ずべし、われらいかてか生死をはなるべきや、乃至あるひは道場にはりぶみをして、なん／＼のことしたら

ら脈略貫通して居るから、かくあるべき筈である。儲すゝみて是より以後一々挙げて其誤を正さるゝ異解なるものは如何なるものであるかを知らねばならぬ、嘗て序説に於て著作當時の信仰界と題して、聖人在世及滅後の信仰的惡傾向を論じて置いた、其事を再言するに、先づ第一に起りたるは眞實御慈悲を戴かずして、罪惡救濟といふ事を邪見にとり、惡を助ける本願故に惡を犯してもよいと考へた、こは末燈抄及御消息集に誡められた如く、藥あり毒を好むべからずと云ふ教誡の起る譯である、そこで第二に是に對して、起り來る異義はたとひ彌陀の本願不思議とはいへど、惡しき者は助からぬと云ふ律法主義に陥るのである、而して歎異鈔が此第二の傾向即ち此再び起りたる律法主義に對して、再び聖人の眞意たる絕對他力の罪惡救濟を説き給ふが歎異鈔の主眼とする所である、此事既に序論に詳説した次第である、儲是より進みて研究すべき事は其再び起りたる律法主義は如何なる説なりしかといふ問題である。

此問題は畢竟歴史問題で諸種の材料を以て、充分に事實を考證する必要がある、去りながらこは一朝一夕に論斷出来る事ではない、將來眞宗の原始時代の研究として恐らくば大に耕すべき餘地ある問題であらう、去りながら、私は此點に於て未だ充分なる歴史的材料を持たぬ故に古人の説を基礎とし、是に對して信仰實驗の徑路を辿り、鄙見を述べるとより致方がない、祖師滅後の異解に就きて、大に研究せられたるは三河の妙音院了祥師である、未だ充分に之を調べねども其嘆異鈔聞記（法話發行所出版）に種々の異義を挙げて結局是を

んものをば道場へ入るべからずなんといふこと、ひとへに賢善精進の相を外にしめして内には虚假をいだけるものか」と云ふて殊勝念佛を誡めたまふたのである、蓋し此二個の弊風は當時の第二の律法主義の重なる異義たりしことは疑なき事であらう、然し了祥師が當時の異義を必らず此二種の何れかに配當せんと試み、歎異鈔の各章を何れかにわりあてたるは少しく附會の説に過ぐるの感がある。されど師の如く此方面に研究の歩を向けたるは其効没すべからざる所である。然し如此信仰の歴史は又信仰實驗の眼を以て見ると云ふ事は忘れはならぬ。

一文不通のともがらの念佛もうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛もうすか、また名號不思議を信するかといひおどろかしてふたつの不思議の子細をも分明にいひいらかすしてひとのこゝろをまどはすこと、この條かへすゝもこころをとめておもひわくべきことなり。

既に詳論せしが如く學問風に聞きわけ知り分くる事を得意氣にする術學派の異義なる故、一文不通の本人にして素直に念佛を信じ稱ふる人に對して、汝は誓願不思議を信じて念佛もうすか、又名號不思議を信ずるかといひおどろかすのである、そこで此異義に對して最も警戒を與ふべき欠點は誓願不思議名號不思議と不思議の文字を使ひながら、不思議といふことが信仰の上に受けられて居らぬのである、畢竟誓願、名號の譯を聞き開きたに止まつて居るのである、抑々親鸞聖人の信仰の要點は此不思議といへる點に存するのである、故に佛法不思議、誓願不思議、佛智不思議等皆一つである、此不思議を



信ずると疑ふとが眞宗たる否との分水嶺たる事は第一章及び第十章に於て繰り返した通である、今此不思議を信ずると云ふは、誓願名號のわけを聞き分け知り分くるといふ事ではない、如來の御慈悲が心に届くなり、誓願の不可思議なる事、各念佛の不可思議なる事が疑ふこと出来ぬ様になつたのである。其故愈、此大悲の親心が心に届くなり、あゝ御不思議と頂けるのが誓願不思議名號不思議を信じたのである、然るに此異解者は不思議を知り分けるつもりで居る、知り分けたならば、不思議ではない、不思議が信ぜられたならば、眞に御不思議と心も言葉もたえてた有様である、そこで此章を讀むものは是非とも末燈鈔をひき合せて拜讀せねばならぬ。

誓願名號同一事

御ふみくはしく、うけたまはりさふらひぬ、またさてはこの御不審しかるべしともおほえす候、そのゆへは誓願名號と申てかはりたること候はず。誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じまた名號を不思議と一念信じとなへつるうへは何條わがはからひをいだすべき、さゝりわけ、しりわくるなどわづらはしくはおほせられさらふやらん。これみなひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへはとかくの御はからひあるべからず候。往生の業にはわたくしのはからひはあるましく候なり、あなかしこ、たゞ如來にまかせおほしますべくさふらふ、あなかしこ

く候、かくめてたくおほせ候へども、これみなわたくしになりぬとおほえ候とは、たとひ言語は正しくあるとも御不思議といたゞけねは畢竟私のはからひにすぎぬのである、故に歎異鈔の次の文に如何にも割切周到に誓願名號の關係を示されても、之をさゝりわけしりわくる心持で見てもならぬ、たゞ不思議といたゞかねばならぬ。

誓願の不思議によりてたもちやすくとなへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなればまづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死をいづべしと信じて念佛まうさるゝも如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらさるがゆへに本願に相應して、眞實報土に往生するなり、これは誓願の不思議を信じたてまつれば名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつにしてさらにことなることなきなり、

是常に反覆する選擇本願念佛の意味である、誓願の不思議によりてたもちやすくとなへやすき名號を案じいだしたまひて云云と云ふは、即ち選擇攝取の事である、即ち布施持戒等の諸行を擇びすて、いかなるものも稱へ安き持ち安き名號を選びたまひたのである、而して此名字を稱へしめんと約束が本願である、かく我等が爲に五劫思惟永劫修行したまふ大慈

五月五日 教名御房

親鸞

このふみをもて、ひとくにもみせまいらせさせたまふへ候、他力には義なきを義とすとほまふしさふらふなり、聖人の御言に接するときは渾然として何とも言へぬ味がある、歎異鈔は正宗の名刀の如く如何にも切れ味は鋭くある、されど鋭くあるだけ餘地がない、末燈抄は九言の間に無限の味がある、現に此章の如きも誓願名號の關係が如何にも周到に示されてある、されど末燈抄は何等の譯柄を言はずに直ちに信仰其者が顯はれてある、歎異鈔には二つの不思議の仔細をも分明に言ひ開かずして人の心を迷すことといふてある、末燈抄には「さゝりわけ、しりわくるなどわづらはしくはおほせられさふらふやらん、これみなひがごとにて候」と先づ學者念佛の根性を戒めたまひてあるのみならず「誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候、かく申候もはからひにて候なり」と飽まで理窟を戒めたまひてある、そして不思議と信ずるといふ點に力を込めて示されてある、即ち「たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうへは何條わがはからひをいだすべき乃至たゞ不思議と信じつる上はとかく御はからひあるべからず」と仰せられてある、夫故末燈抄の次の御消息にも左の如くある、佛智不思議と可信事、

御ふみくはしくうけたまはり候ぬ、さては御法門の御不審に、一念發起のとき無碍の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに、つねに淨土の業因決定すとおほせられ候、これめてた

大悲の親心はいかなる御不思議ぞといたゞきたのが誓願の不思議を信じたのである、其親心がいたゞけるや否や念佛申さんと思ひたつ心のおこるのが名號の不思議である、其名號は淨土にむさるゝ業か地獄におつる業か存知せぬども、知らず、識らず、南無阿彌陀佛と稱へらるゝは畢竟如來の御はからひにして、即ち稱我名字の本願に相應するものである、既に誓願名號が不思議である、其不思議が不思議と信ぜられ稱へられるが不思議が信ぜられたのである、かく信ぜられ稱へられるのが既に如來の不思議の御はからひである、蓮如上人の御文に、信ずる心も念ずる心もみな彌陀如來の御方便より起さしむるものなりとあるが、即ちみな如來の御はからひである。

かく信仰の味ひから頂けば何の苦もなきとなるも、此處に間違の生ずる譯は故なしではない、それは同じ法然上人の御門徒の中にも他の人々は選擇本願を忘れて、念佛自行になすのである、夫故聖人は其選擇本願を信ぜねばならぬといふ點に重きを置きて御教化なされたが眞宗の眞宗たる點である、略文類に深藉本願眞宗といふも此意味である、又選擇本願弘惡世といふも此意味である、其處で其意味を信仰の上で頂かずして理解の上で律法的に考へたものゆへ、念佛しても誓願不思議を信ぜねばならぬと主張する異議を生ずるに至りたのである、念佛の律法主義を拂ふために本願不思議をすゝめたまひたるところ、又誓願不思議を律法的に理解することになつたゆへに此誤を生じたのである、眞に他力の念佛を稱ふるときは即ち本願を信ぜられたのである、眞に本願不思議が信ぜられたならば自然に念佛か稱へらるゝのである、撰擇本願



の事を述ぶるとき私か常に引く譬喩にて云へば、撰擇本願といふは親が子の爲に撰擇して下された衣服である、即ち亂暴の子の爲に絹布等の衣服を撰びずして、手織の衣服を撰び取りて作りて呉れた親心である、而して念佛は恰も其手織の衣服である、其親心を受けたのが誓願不思議を信するのてである、其親心を受けながら衣服を着ぬならば眞に親心を受けたと言へぬ、其親心を受くるなり直に衣服を着する如く、誓願不思議を信するや否や念佛稱へらるゝのが名號不思議である、一本に「誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して云云」とある、このむねの文字は二者の間に輕重を定むる嫌ある故になき本を可とす、かくて誓願の不思議名號の不思議は全く同一にして如來の我等罪惡のものを助けたまふ御不思議なり。

つぎにみつからはからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて往生のたすけさはり二様のにもふは誓願の不思議をばたのまずして、わかこゝろに往生の業をはげみてまうすところの念佛をも自行になすなり、このひとは名號の不思議をもまた信せざるなり、信せざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して果報の願のゆへに、つゝに報土に生ずれば名號不思議のちからなり、これすなはち誓願不思議のゆへなればたゞひとつなるべし

前節に擧げたるは當初より誓願不思議と信する直入の機につきて示したまひたのである、そして今こゝに擧げたるは誓願名號の不思議を信せざる廻心の機につきて示したまひてある、即佛智不思議を信ぜずして、自力の計を挿みて、善業の

信ぜしめんとする佛の大慈大悲が十九二十の本願である、何人も權實眞假の判教ばかりに氣をつけて、其權假は結局眞實に引き入れんと佛陀の大慈大悲を感謝せねばならぬ、此意味は末燈鈔の次の文によりて明らかに了解が出来る。

その信心をうることは釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたりとしるべし、しかれば諸佛の御あしへをそしることなし、餘の善根を行する人をそしることなし、この念佛する人をにくみそしる人をもにくみそしることあるべからず、あわれみをなし、かなしむこゝろをもつべしとこそ聖人はおほせことありしが、あなかしこ、佛恩のふかきことは懈慢邊地に往生し、疑惑胎宮に往生するだにも彌陀の御ちかひのなかに第十九二十の願の御あはれみにてこそ不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ

世に我を疑ふものを疑はず、我を惡むものを惡まざる如く、誓願不思議、名號不思議を疑惑するものも如來は見捨てたまはぬ親心が十九二十の本願である、そして疑ひながらも稱へるうちに遂に御慈悲が届て下さる、是れ即ち名號不思議誓願不思議である、かく徹頭徹尾たゞ不思議と信ぜさせて頂くの外はない。

既當番の夜

増田 八 風

多敷き駒も寝入りて二人守る既しづけく夜は更けにけり  
既には火をゆるされず冬の夜をとゆきかくゆき  
臥す駒の寝蓑くゞりてこぼれたる麥粒あさる鼠にくしも

人は助かる、惡業の人は助からぬと自己の業の善惡によりて往生の定不定あるものと二様にもふは全く罪惡の者をしてたまはぬ誓願不思議を信ぜずして、自分の心にて往生の業を勵みて稱ふる念佛をも自分の行とする故に、結句名號の不思議を信ぜざることになる、しからばかく不思議を信ぜざる者は如何すべき、彼等は佛智不思議を信せざる故に永久佛陀に近く事の出來ぬといふ事になれば、一旦不思議を信せざるものは永久信せられぬ事になる、然るに十九二十の本願を立てたといふが果遂の願である、邊地懈慢界は菩薩處胎經の説で十九の願の化土である、疑城胎宮は大經の説で二十の願の化土である、佛智を疑惑する者は自業自得の道理で、自ら懈怠憍慢なるもの故に懈慢界に止り、疑惑の心を脱せざる故に含花未出の結果となりて疑城胎宮に止るが、五百歳の年を経れば大慈大悲の果遂の願のために、遂に第十八願の眞如の門に轉入して眞實報土に往生するこの出來るのは、疑惑ながらも稱へさして下さる名號の御不思議力である、そしてかくの如く遂に第十八願に轉入さして頂くのは即ち十九二十の本願あればこそである、故に名號の御不思議で第十八願へ不知不識轉入さして下さるのは全く十九二十の本願不思議の御力である。

こゝに一つ注意すべきことは十九二十の本願といへば直ちに方便の願にして、恰も疑惑の人を遣込めておく牢獄の如くに考へられて居る、如何にも佛智を疑惑するが爲め、自業自得の結果七寶の牢獄に墮するも、如來本願の思召はたとひ本願を疑惑するものでも、當方は決して捨てずして飽迄本願を

現代思潮と信仰

近角 常 觀

自分の思ふ處では信念が總ての根本である、近年の思潮たる所謂煩悶、人生問題に苦むといふ事、此解決はドウしても信仰に求めなければならぬ、全體人世の何物も人に満足は與へぬ、功名富貴權勢下つては諸の物質的の事物、高くは種々の學問道徳、決して此處に満足は無、煩悶は此満足求めて得られぬ處に起る現象である、理想的な極眞面目な清らかな人生社會乃至人との交を求めても實際には得られない、無抵抗なれとのトルストイが教も如何に努めても出來難い、理想と實際とは違ふ、唯一の満足は如何にして來るか、言葉では表し難いが此處に眞の絶對の慈愛がある恵があるといふ事を實驗する事である、此慈愛が宇宙人生に遍滿して居る事を理屈でない、眞に心に感じ直接に體得して味ふ事である、實驗の信仰と自分が云ふのは此意味である、今の煩悶人生問題は此信仰の境まで導かれねばいかぬ、而して後始めて眞の満足は得らるゝのである、現實と理想との區分は此處に至つて無くなるのである、絶對の慈愛あり恵ありと感ずると同時に人生其物は悉く恵の顯れ慈悲の化現と變ずる、トルストイが無抵抗を説く時に彼自身は多分此信仰の境を體達しての結果であらう、併し之を奉ずる他の者は此中心の信仰を忘れて直ちに其實行だけをやらうとする、そこで苦悶不平が起る、信仰とは人生を離れたものでは無い、人生の眞意義を自覺するのが信仰である、世の中は決して人の思ふ様に平和無く喜び無きもの



ては無い、かく思ふは自分の迷妄である、此方から抵抗ありとするから抵抗がある、其實世の中は初から無抵抗に出来て居るのである、敵を愛せよとは矛盾である、一力に敵と念ひ他方に之を愛する、出来る筈が無い、唯之を今迄敵と考へたのは誤だつた其實敵では無かつたと氣附いて始めて愛する事が出来る、無抵抗なれと云ふても世は抵抗だと考へて如何して無抵抗に成れやう、根本の信仰に還らなければ駄目である、此頃とても人生問題に苦んで居る事は同様である、唯近頃之を救ふ方法として種々斯うしてはいかぬ、あゝしては如何と云ふ風な教訓、信仰上の言で云へば律法主義を持ち來つた様である、之は或意味少くとも道德的に以前より多少進んで來たものと觀る事が出来やう、併し自分等から云へばこれでは眞の救済は出来ぬ、唯表面から教訓律法を以て壓へ附けるのは眞の満足平和は無い、更らに根本に向つて救済の方法を講ぜねばいかぬ、唯信仰、人生は喜びである慈悲であると感ずる、此處に一切の實際的的人生社會問題は解ける、政治にせよ實業にせよ未だ解決せられて居ない問題は甚だ多いが之は人生の眞意義を自覺する即ち信仰の境に至つて解ける、人生に於ける眞の活動は悉く此信仰の一點から流れ出したものでなければならぬ、煩悶より律法となるは自然の道程である併し最後の解決は信仰に須たなければならぬと云ふ事を考へて貰ひたい。(東京毎日新聞所載)

近角常觀著

# 人生と信仰

- 第一章 人生問題と信仰
- 第二章 倫理力行と信仰
- 第三章 社會問題と信仰
- 第四章 世界宇宙と信仰
- 第五章 悲觀思想と信仰
- 第六章 犯罪心理と信仰
- 第七章 國家秩序と信仰

最新刊 定價卅錢 郵稅四錢 袖珍美本

發行所

本書は一昨年雑誌「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸氏の需要益々急切なる爲め、再び一冊として茲に發刊したるものなり。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若くは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事と得ん。是れ本書と發行する所以也。

事と得ん。是れ本書と發行する所以也。

森求道發行所

東京 東區 本町一丁目 九番地  
 東京 東區 本町二丁目 九番地  
 東京 東區 本町三丁目 九番地  
 東京 東區 本町四丁目 九番地  
 東京 東區 本町五丁目 九番地  
 東京 東區 本町六丁目 九番地  
 東京 東區 本町七丁目 九番地  
 東京 東區 本町八丁目 九番地  
 東京 東區 本町九丁目 九番地  
 東京 東區 本町十丁目 九番地

時報

羽村 府下西多摩郡羽村は我が信仰的理想郷として常に消息を掲げし處なるが二月一日の羽村に於て之を訪へり、多摩川の畔に御同朋一人の迎を受け、車上甲州の山々を眺めしむ、川に御同朋の一人と共に會場禪林寺に到り、普通から信に感すを始む、既に昨年已來一年を経たり、若し普通から信に感す法縁の少き御同朋の増加せる大に嬉し、而して何れも其に信に因縁尋常ならざるはなし、人生問題に佛智不思議の如きもの接し、二席の講話を爲し、人生問題に佛智不思議の如きもの接し、なり、來會者皆青年及び人生苦悶の人のみにして求道の念、信に仰上、講話後信仰談話を開き、各自其信念を告白し、殊に生に拘はらず大悲の感泣する毎に感謝に堪へずといひ、或は身も動く能はざる時此の如きものを於實悲憫の聲ならざるはなし、四更會場を辭し、其言ふ所何れもを於實悲憫の聲ならざるはなし、無限の清越身の清流眼に走り白沙水朝霧の間此斷續してなし、何れも満身の感謝を告げ、亦朝前此室を披し、會人曰く、難有いの側居るも皆分ると、他家に小憩せざるはなし、何に分かるかと、曰く、隨分久しき間苦勞したる故御同朋に涙下りて、主人酒癖あり、水に酔ち、忽ち驚醒するところあり、佛智不思議の稱名となり、歸京す。



●本書は勤儉布教に要する唯一の武器なり（製本既成）（即時發送）

法藏編編輯局

# 勤儉布教資料

定價金廿五錢  
求道讀者  
郵稅不要

軍隊に參謀を要する如く布教に必要なるは精妙なる新資料なり本書は談叢に名家碩徳が、著書雜出せ聖詔の布演、講話、所感、訓誡等を簡明に措拾網羅し、其第二輯話材には名家の勤儉に關する史談譬喩、逸話を掲載し、其第經釋の聖訓、格言を蒐集し、**戊申詔書衍義**に附録し、**布教家に滿囊の好**を附録し、**材料**を供給すると俱に名家の勤儉の布教の大ハノラマ也

發行所 京都市東區大坂口一七〇番  
法藏館

## 第二卷

### 説古き家

三井甲之作

ザンネバ 死ぬる土  
廣瀬 青波

廣瀬 青波

長冷たき夜風  
青波 譯

青波 譯

詩後 姿  
甲之作

甲之作

評 論  
●新年文壇の一瞥  
●自然派作品の意義

## 第二號

行發日一月毎 價五十錢一稅 錢十九年半

### 歌壇漫言

甲之

●歌壇の惡傾向  
●切實ならざる門外漢的態度  
●歌壇の將來

### 萬葉集第十六卷

甲之

### 新刊俳句集短評

乙字

### フキル、メイ自傳

川上 久二

### 俳話

大須賀乙字

發行所 東京駒込千駄木五〇番  
會歌短岸根 所行發

## 第二卷第貳號目次

- われはわろしとしらぬ我
- 如來よりたまはる信仰は古
- 今上下同一である
- 苦しめる人の手紙を讀みて
- 一代聞書の一節
- 我と同く苦悶の友に
- 佛言魔語

發行所 京都府紀伊郡柳原町 愚禿房

# 道 光

行發日八月一 冊貳錢郵稅五厘

- 道德念佛申さるべし
- 唯信樂の味ひそれ自身
- の外はないのである
- 愛樂錄
- 痴魁漫語
- 佛法をあるじとし世間を客人とせよ
- 佛のみ名
- 今日のさち（信仰唱歌）
- 御信心と頂くといふ事
- 繪像木像について

# 信世界

第貳卷第壹號目次

- 融通念佛垂示 愚信坊
- 新春の榮光 賢如生
- 予が年を迎ふる覺悟 舊弊野老
- 西の年 舊弊野老
- 新年に信友に與ふるの書 前田 慧雲
- 眞の報謝 大森 透脱
- 一夫四婦のたとへ
- 鸚鵡の孝心（雜寶藏經）
- 猫と鷄（イソツブ物語）
- 吉田松陰先生の新年俗解

發行所 大阪府南河内郡川西村大字甘山 信世界社文書傳道會



故清澤滿之師序 近角常觀著

訂正 增補

# 信仰之餘瀝

第拾版 定價卅錢 郵稅四錢 袖珍美本

本書は著者が入信劈頭の著作にして、當時著者が内心に經驗せし煩惱解脱、慈愛感謝の信仰を有るが儘に眞摯率直に告白懺悔したるもの、江湖同朋の愛讀絶ゆることなく、發行以來既に九版を重ね、發行部數一萬以上に上り、本書を縁として同一信仰に入り給ひし人々の多數なるは洵に感謝に堪へざる所也。然るに久敷く品切にて信友諸君の高需に背き居りしが、今回彌々其第拾版を刊行するに至りたり。

殊に今回に於て著者は本書の完全を期する爲め、根本より版を改めて誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に爾後の信仰經過を告白して、附録として「予が信仰的實驗」の一篇を加へたり。斯くして本書は面目を一新するに至りぬ。

## 新刊 信仰之餘瀝要畧

定價五錢 郵稅二錢 部數に應じ充分割引す (但し四冊迄は部稅二錢也)

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

### ●●●●●新刊廣告●●●●●

#### 近角常觀著

## 親鸞の信仰

附錄 眞宗教證

定價七十錢 小包料八錢 クロース綴 美本

#### 彌々出來せり

本書は嘗て本誌に連載せる「眞宗慶嘆」に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

發行所 東京東區振替口座東京二ノ三三三番 無我山房  
取次所 東京本郷區振替口座東京森川町二二六六九六番 求道發行所

#### 規定

- 一 本誌は毎月一回一日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一 部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十二年一月二十七日印刷  
明治四十二年二月一日發行

發行所 求道發行所  
東京市本郷區森川町一番地  
發行兼編輯人 近角常觀  
印刷人 白土幸力

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東堂

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所



前號要目

求道

◎信

自齋

◎底下の凡愚

◎慈光の照曜

講話

◎三寶紹隆

告白

◎佛の強縁

近角常觀

長尾かず子

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第九バンヤン鹿

慶讃

◎十七憲法

序論

近角常觀

歎歌

◎夜の歌(長詩)

時報

三井甲之

◎昨年の恩寵◎昨年の地方傳道

求道第六卷第二號 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十二年二月一日發行 (毎月一回一日發行)

東京市神田區土代町二ノ一三光堂印刷